
機巧乙女之手妻顛末

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機巧乙女之手妻顛末

【Nコード】

N0067F

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

江戸時代を舞台にしたSF時代劇。深川佐賀町にある水油仲買問屋の吉屋では、毎年のように奉公人が謎の死をとげていた。事件の解明に乗り出したのは、富岡八幡門前町で見世物小屋を営む美人手妻師、松江太夫とその仲間たち……。『空想科学祭2008』連載第2弾

吉屋のうわさ（前書き）

こんにちは、閉伊琢司です。『空想科学祭』2本目の連載は、”SF時代劇”というものに挑戦してみました。なお『空想科学祭』には、素敵なSF作品がそろっております。そちらの方も是非ご覧になってくださいね。

吉屋のうわさ

一、

「するてえと、何かい……？」

伊助は、しわだらけの顔をいつそう曇らせて、骨ばったあごをずいと突き出した。

「お前いさん、よりによつてあの吉屋に、お玉ちゃんを奉公に出したと……？」

「へへ……。まあ、そんな事になつちまつて……」

いかつい顔をゆがめて、泣き笑いの表情で藤次が後頭をぐしゃぐしゃと搔いた。

格子窓からさしこむ白い夏の日ざしが、ゆっくりとただよう煙草のけむりをきらきら光らせる。

二の句も告げないと言つたふうに無言で藤次をにらみつけながら、伊助は手もとも見ずに煙管の灰をぽんと水桶の中にたたき落とした。

「そいつあ、面白ろくねえな。お前いだつて、吉屋の噂くらい知つてるんだろ？」

ふだんは好々爺然とした伊助だが、ここ一番というときには、迫力ある三白眼が相手を射る。藤次の家族が住まうなめくじ長屋の差配というのは、たんなる彼の表の顔にすぎない。藤次は伊助と目を合わせることができずに、何度も汗をぬぐった。大柄で腕っぷしの強い藤次だが、小柄な老人の伊助に詰めよられて小さくなっているようすは、なにやら気の毒でもある。

「へい、そりやもうあそこの噂はだれでも知ってますよ。ましてや、あつしはこの稼業ですから」

藤次は、刻み煙草の行商をなりわいとしているが、その実、深川

一帯を縄張りとする十手持ち、紙屋の佐吉親分の下っ引きでもある。
「あつしは、もちろん娘を止めたんですよ、はい。だけどあいつあ、
こつちの話なんざ聞きやしない」

伊助は、いちど宙を見すえ、静かにあごを引いてから腕組みして
目をつむった。

どこかで目白めしろのさえずるこえが聞こえる。

「お玉ちゃんは、いい娘なんだがねえ……、頭もいいし、器量もい
い。ただ、ちよいと頑固なのかなあ……」

伊助のため息は、煙草くさかった。

「あれは、嬢かかあの血なんです……。頑固なところは、本当そっくりで」
「そんな事あどうでもいい。それより何だって吉屋なんだ？ ほか
にも奉公の口は、いくらでもあつただろうに」

「はあ……」

「いってえ誰の世話だい？」

「話を持ってきたのは鴻野屋のおかみさんてひとで、まあ早いとは
しが、うちの嬢あの客なんですがね。ちようど奉公人がひとりいな
くなったてんで、とり急ぎ代わりを探してるらしくて……」

藤次の妻おりくは、廻り髪結だ。情報収集にはうってつけの仕事
で、事件の手掛かりから、娘の奉公の口まで都合良く舞い込んでく
る。

「いなくなつたつてえのは、あれだな。年季があけて里に帰つたて
なわけじゃあるめえ」

「へえ……」

「やはり、死んじまつたんだな？」

「まあ……、それは後で知つたんですがね」

「今年に入つて吉屋の奉公人が死んだのは、もう三人目だ。しかも、
みな若い女中ばかりときていやがる……。お玉ちゃんには、そのへ

んの事ちゃんと話してあるんだろうね？」

「そりやもちろんですよ。……でもね、吉屋つて聞いたとたんお玉のやつ、ぽうつと頬を染めちまいましたね。あとはもう何を言つてもうわの空で……」

「へえ……。そりやまた妙な話じゃないか」

「でしょ？ あつしは、なあんにも知らなかった。でも嬢あは、知つてやがったんで」

「何をだ？」

「これですよ！」

藤次は、節くれだつた小指を立ててみせた。

「お玉ちゃんの？」

「へい。あつしは、腰抜かすほどびっくりしました」

「はつはつは！ 何もそんなに驚くこたあねえや。もう年頃なんだし、あれだけの器量良しだ。男どもが放つちやおくめえよ」

藤次はむつとして、

「そりやあ、お他人様はそれでもいいでしょうけど……」

と拗ねたが、伊助がすぐにやり返した。

「おいおい、お他人様とは何だね。私は、あの子を孫のように可愛がつてきたつもりですよ」

「へへ……。かつちねえこつて」

「まあ、そんな事はどうでもいいが……。問題は、お玉ちゃんの惚れたその吉屋の奉公人つてやつだな」

「平次つていいましてね。お玉より二つ上の、牛みてえにのつそりとした野郎で……。あつしが芳町にいたころ、斜向かいに孝兵衛つてえ畳刺しの職人がいて、早え話そのせがれなんですが、お玉は小せえころからこの平次によくつきましてねえ……。よく一緒に遊んでましたが、こつちに越して来てからはそれっきりだと思つてたんですよ……」

「かくれて逢引してたつてわけだ。知らぬは親父ばかり成り……。つてやつだな」

「へへへ……、そういうこつて」

やっと伊助の機嫌が良くなったので、藤次は少しほっとした。

「ま、お玉ちゃんのいい人が、奉公してるってえなら、頭から反対もできねえな」

「でしょ？ 親分にも同じ事を言われました」

「とにかくお前いは、しばらく気をつけて見てやるこつた」

「へい、あつしもそのつもりです」

「私のほうでも、誰かに調べさせよう」

「ありがてえ！ 大家さんが助^すけてくださるんなら百人力だ」

「まったく調子のいいやつだね、お前いさんは」

げんこつ飴の売声とそれを囃し立てる子供たちのざわめきが、長屋のわきをゆっくり通り過ぎると、どこか遠くのほうで雷が鳴った。

「いやだねえ。ひと雨きそうだよ……」

次回へ……。

吉屋のうわさ（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

げんこつ飴の売声は、「あ、来たわいなー来たわいなー、げんこつ飴がまた来たよー。あ、じーちゃんばーちゃん孫連れて、早く来ないと無くなるよっ」ってな感じです……。

おきゃんな娘

二、

「東西東西ーっ。まず最初は白紙を一枚、一応は裏と表をあらためます」

地氈子じちしと歓声のなか、高座の中央に敷かれた緋毛氈ひもせんの上にちよこんと正座した娘は、幻術をやつるような手さばきで、すばやく白紙を銀杏の葉のかたちに切りととのえた。それを二枚かさね根本をこよると、一匹の白い蝶ができあがる。腰にさした白扇をひろげはたはたと煽ぐと、手のひらに乗せた紙の蝶が、まるで生きた本物の蝶のように中空高く舞い上がった……。

観客がどよめく。

年のころは十七、八の身のこなしがどこか艶やかな娘だ。縞模様の振袖たすきに襷たすきかけ、髪は高島田に結っている。笑うと牡丹が咲いたように華やぐのだが、いまは雛人形のようにしやちほこばっていた。

「御覧にいらしまするは浮かれの蝶、舞い立つ姿は花散る里ーっ」

再びの地氈子とともに、わっと客席がわいた。くるくるともつれ合いながら舞う二匹の蝶は、つかの間の逢瀬を楽しむ恋人同士のようにたわむれ、高く低く右に左に、客の目を釘づけにした。

「胡蝶の舞のひと手、お目に止まりますれば、これにてご無礼を仕ります」

「いよっ、松江太夫。日っ本ー！」

勇肌と書いて“きゃん”と読む。深川女の心意気だそうな。

利口に立ち回る処世術を野暮とあざ笑い、たとえ損な役回りを演じることとなつても粋を貫く心意気、この稟質な美意識こそが”きやん”の真骨頂なのだ。

そして、ここに辰巳芸者にも負けないくらいの”きやん”な娘がいた。深川は、富岡八幡宮の門前仲町に小屋掛けする見世物小屋の美人手妻師、松江太夫である。

「ああ、暑い暑い……。こう、蒸し暑い日が続くと、こんな稼業が心底いやんなっちゃうねえ……」

見世物小屋の客席を満たす歓声に送られながら、松江太夫が紫色の幔幕をめぐりあげ、腰をかがめて舞台裏手にさがってきた。のろのろとした手つきで襷を外しながら、三つならんだ縁台の真ん中に腰をかけ、うつろな上目づかいでため息まじりに額の汗をぬぐう。

「一日中こんな物を着てたらさあ……。この若さで、梅干しみたいなお婆ちゃんになっちゃうまいかねえ」

松江太夫は、かぎ型に曲げた人さし指でぐいつと振り袖の襟をくつろげると、もう片方の手で白扇をはたはたあおぎながら、豊かな胸の谷間に生温い風を送りこんだ。

「よう、太夫！ 相変わらず婀娜なすがたが挑発的じゃねえか……」
松江太夫が、うつすらと紅をさした一重まぶたの下にある円らな瞳を細めて、色っぽい流し目ですみつこのほうを見やると、いそがしく立ち働く裏方衆の向こうがわに、ひよろりと背の高い五十がらみの男が、生来の猫背をさらに窮屈そうに丸めて座っているのが見えた。路考茶の縞物小袖に博多織の角帯をきりりと締め、役者のように鼻筋のおった相貌のでっぺんには、申し分けていどの本多髷を結っている。

「まあ、儀右衛門の旦那じゃございせんか！ ちょうど良かった

わ……」

松江太夫は、気だるい仕草で立ち上がると、赤い鼻緒の黒漆塗り下駄をからりからりと引きずりながら、儀右衛門の前にやってきて、仁王像のように立ちはだかった。儀右衛門が、煙管をくわえたまま上目づかいに松江太夫をちらりと見る。とたんに、彼女が振り袖のすそをがばつとめくりあげた。

「……な、何だい、やぶからばうに！」

「何だいじゃありませんよ。旦那に造ってもらったこの足、熱氣が中にこもっちゃって暑いつたらありやしない。とてもじゃないけど、あたしややりきれませんよ」

松江太夫のすりりとした右足は、ひざから下が………金属製だった………。

「なんとかして下さいよう……、儀右衛門の旦那あ………」

田中儀右衛門久重は、希代の天才からくり師である。

北九州は久留米の通町にある鼈甲細工屋、田中弥右衛門の長男として生まれた彼は、十代のころより数々の複雑なからくり装置を設計製作してはみなをあつと驚かせ、ついには、”からくり儀右衛門”の通り名で世に広く知られるようになった。

のちに”近江大掾”おうみだいじようを名乗り、上方でもかなりの有名人であったが、二年ほど前、イギリス船が浦賀に來航してからは、頻繁に江戸に出てくるようになった。

舞台の方から、わつと歓声があがる。軽業師の早川虎之助が、十八番の”天狗の飛行”を見せたようである。

「ちよいと焦げ臭えなあ……。油が焼けちまったかな？」

儀右衛門は、煙管の先で松江太夫の右足首をこんこん叩きながら、口の右端をにいつとつり上げて笑いかけた。

「こんな事じゃあねえかと思って、今日はちよいと良いものを持っ

てきてやつたんだ」

そう言いながら側らに置いてある風呂敷包みを開いて、小さな桐の箱を取り出した。

「何ですか、これ？」

「一昨昨日さきおとつひにな、英吉利えいぎれすから届いたばかりの”くうらー”っていう代物しろものよ」

箱の中には、銀細工のように綺麗で精密な部品が、ていねいに真綿にくるまれたまま収められていた……。

「この三枚の羽がな、こうやってくるくるって……”えれき”の力で回るのよ……。こいつがありゃあ、おめえ、足の中にこもった熱気なんざあ、すっかり外に出せるってえ寸法よ。どうだい、さっそく取り付けてみるかい？」

「ぜひともお願いしますよう」

「よし、それじゃあここに腰かけて、そうそう……。そうしたら、おみ足をこっちに寄越しな……」

天才からくり師、田中儀右衛門は、さまざまな工具がぎっしりと詰め込まれた桐箆きりたんす笥の引き出しを開けると鼻唄まじりに作業を始めた。

松江太夫が右足を失う大怪我をしたのは、二年ほど前、富岡八幡宮別当の永代寺で開帳が行われた日のことである。

ごった返す参拝客を相手に、歯磨き粉売りの大道芸人が口から吹いた火が、思いも掛けず松江太夫たちの興業していた見世物小屋に燃え移ったのだ。

その小屋は、丸太の骨組みに筵むしろをはりめぐらせただけという簡素なもので、火の回りは予想以上に早かった。

客を外へ逃がすため、煙にまかれながらも必死で中に踏みとどまった松江太夫であったが、いよいよ炎に舐めつくされ消炭のようになった梁が天井から崩れ落ちると、その下敷きとなり気を失ってしまった。

駆けつけた火消しの若い衆があわてて彼女を引きずり出したが、梁材に潰された右足はついに元へは戻らなかったのである……。

何を言つてやがる！ 命があっただけでもめつけもんさ。八幡さまに感謝しなくちゃ……。

同情されるのが大嫌いな彼女は、いつもそう強がつて見せた。

「出来たぜ……」

部品の取り付けが終わった松江太夫の足には、脛すねの裏側に風を通す小さな穴がいくつも空けられていた。

「その、くるぶしのところにある突起を押してみな」

「これかい？」

松江太夫が、イボのような突起部分を押すと、ぶーんと音がして冷却装置の羽が回りはじめ、足の中にこもっていた熱気が排出されていった……。

「……ちよいと音がうるさいけど、でもなかなか良い塩梅あんばいじゃないか」

彼女は、機嫌良く立ち上がると、儀右衛門の前でおどけた恰好をしながらゆっくりと回ってみせた。

「どれどれ……」

そこへ、居合抜きの人、永井兵庫が寄ってきて、松江太夫の腰のあたりに日焼けした丸っこい顔を近づける。

「ほう、こいつあ粋なもんだね！ 太夫の足もとか何だか涼しい風が吹いてくらあ」

「ちよつとお、やめておくれよ……。何だい、この人は？ ひとの尻に顔を近づけちゃってさあ。屁でもひっかけてやろうか！？」

「よせやい。太夫の口からそんなせりふ……。ひいきの旦那衆が聞いたら幻滅するぜ」

その時、物まね師の松川鶴吉が女の声色を真似ながら言った。

「ねえ、太夫う。甚平店じんぺいだなの伊助さんがおみえになったわよん」

「え？ 六軒堀にあるなめくじ長屋のご隠居かい？ そりゃあ珍しい……」

松江太夫が、そう言い終わらぬうちに伊助が、裏口の筵をめぐって骨張った顔をずいっと差し入れてきた。

「よう、太夫。相変わらずみてえだな」

「おや、ご隠居。久しぶりだってのに、ずいぶんとご挨拶じゃないか」

「ははは……、氣い悪くしたら謝るけどよ。今日は、お前いさんに頼みがあつて来たもんでな……」

松江太夫は、軽く科しなをつくりながら伊助に近づき、白扇で自分の顔を煽ふぎながら目をぱちぱち瞬かせた。

「……頼みって何だい？」

伊助は、底光りする双眸をすうつと細めて松江太夫を見据えながら言った。

「ちよいと……調べてもらいてえ事があるんだ」

「何を？」

松川鶴吉の口まねで、鶯うぐいすが一声鳴いた……。

「佐賀町にある水油仲買問屋でな……吉屋ってんだ……」

次回へ……。

おきゃんな娘（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

手妻とは手品、つまり江戸時代の奇術の事です。日本で初めて刊行された手妻の本は『神仙戯術』という中国からの伝書です。白紙で作った蝶を飛ばす術もこの本にちゃんと載っています。

女中頭のおたき

三、

「おたきさん、ちよつといいかな……？」

せまい額にふき出す汗を袖先で拭いつつ、牛なみと言われる抜群の肺活量で、吹火筒から竈へっついに風を送っていた女中頭のおたきが、吉屋の番頭、四郎兵衛に声をかけられたのは、玄関先の打ち水もあつという間に干上がつてしまふような、晴れ渡つた夏の盛りの早朝であつた。

「……ああ、番頭さん。おはようございます」

「いやあ、今日も暑くなりそうだねえ」

吉屋の奉公人中もつとも古株である初老の番頭、四郎兵衛は、とがつた顔の輪郭に前歯が突き出した、鼠のような風貌の男であつた。常にきよろきよろと定まらない視線は、何とも肚はらの読めない彼のいやらしい性格を物語っており、剛胆で気骨のあるまるで侍のような気性のおたきは、この小柄で貧相な番頭が嫌いであつた……。

「今日から、うちで働いてもらう事になった、お玉さんだ。すまないが、あんたこの娘の面倒を見てやってくれないかね」

四郎兵衛の横で、十七、八の可愛らしい娘がていねいにお辞儀をした。

「玉です……。どうぞ、よろしくお願いします」

どこかで風鈴が、ちりんと鳴つた……。

おたきは、お玉の華奢わさげな姿を、頭のとつぺんから足の先まで舐めるように見回していたが、やがてすつくと立ち上がり鼻をずずつと啜すすつた。両肩の筋肉は鞠のように盛り上がり、多少、がに股また気味の下半身は、白のようにでんと厨くちやの土間に据わっている。そうして、

腫れぼつたい目で四郎兵衛の青つちよろい顔をはつたと睨みつけた。
「へえ……。すると、この前死んだ、おみっちゃんの代わりというわけですかね……？」

四郎兵衛は、面白いほど狼狽えながら、

「ま、まあ……。そういう事です……。あなた達も人手が足りないんじゃないかと思ひましてね……。では、おたきさん、後はよろしく頼みましたよ」

と掠れた声で言い残して、そそくさと奥に引つ込んでしまった。

おたきは、ふんと鼻を鳴らしてその後ろ姿を一瞥いちべつしたあと、やぶ睨みの腫れぼつたい目でお玉の顔をまじまじと見つめながら、やがて深いため息をついた。

「お玉ちゃん……だったね。あんた、どうしてこの店に奉公するんだい？　ここの良くない噂は、聞いてるんだろ？」

お玉は、一瞬びつくりしたように大きな目をぱつちりと睜ひらつたが、やがて、はにかんだような笑顔で、しかし、はつきりとした口調で答えた。

「私……、ここで手代をしている平次さんとは、ずうつと以前から恋仲なんです」

「え………？」

おたきは、虎魚こいせのような大口をあんぐりと開けて感嘆の声を漏らしたあと、本日初めての笑顔をみせた。

「へえ！　あんた平次さんの……。じゃあ、彼の後を追いかけて、この店に奉公しに来たというわけかい？」

彼女は、竹を割ったような性格の平次とは、よくうまが合った。だから、浮いた話とは限りなく無縁と思われる、あの、まな板のような顔をしたウドの太木に、こんな可愛らしい恋人がいたという事実が、何だかとても嬉しかった。

「別に、平次さんを追いかけて来た訳じゃあないのですよ……。たまたま、知り合いにこの吉屋をお世話して下さった方がいて……」

……それで、ああ、これからは平次さんと一つ屋根の下で一緒に働けるんだ……って」

「結局、同じ事じゃあないのさ。でもね、お玉ちゃん。この店で若い女中が何人も死んでるっていうのは本当の話なんだよ……。あんた、いつかは平次さんと所帯を持つつもりでいるんだろ？ だったら、こんな所で死んでしまわないよう十分気を付けておくれよ」

お玉は、”所帯”という言葉に多少頬を赤らめながらも、神妙な面持ちで「はい」とうなずいた。

「いいかい、この店で何かおかしな事に出つくわしたら直ぐに私に相談しておくれよ。何も遠慮することはないからね。……あたしやあね、いっしょに汗水たらして働いてくれる仲間に、もうこれ以上死んじまつてほしくはないんだよ……」

そこに、襷^{たすき}掛けした若い女中が二人、みそ汁の具にする大根の葉や、糠床から引っぱり出したばかりの漬け物が入った桶を抱えてやってきた。

「ああ……、お勢ちゃんに、お小夜ちゃん。ちょっとこっちに来ておくれよ」

おたきが手招きすると、二人は、互いの顔を見合わせ目をぱちくりさせていたが、やがてお玉の存在に気付くと、合点がいったという笑顔に白い歯を覗かせながら近づいてきた。

「この娘はね、今日から私達といっしょに働くことになったお玉ちゃんでいうんだ。あんた達も仲良くしてあげておくれよ」

「玉です。よろしく願います」

お玉が丁寧にお辞儀をすると、お勢とお小夜は、にっこりと笑って挨拶を返した。二人とも、お玉に負けなくらいの可愛らしい娘だった……。

しかし、その日の晩、二人の若い女中のうちお小夜が、

この店の主人、吉屋喜兵衛からこつそりと呼び出しを受けた……。
大川の方から妙に湿った風が吹いてきて、厨の格子窓にぶら下げ
ていた風鈴が激しく鳴り続けていた……。。

次回へ……。

女中頭のおたき（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

竈ヲ俗ニ”ヘツイ”ト云又訛テ”ヘツゝイ”ト云也……と『守貞謾稿』にある通り”へつつい”とはカマドの事です。銅壺とも呼ばれますが、この上に釜を乗せて煮炊きします。「月夜に釜を抜かれる」という諺は、ひどく油断する事の例えですが、”つき”と”かま”には性的な意味合いも含まれていて、ようするに”尻がかり”の下ネタとしても捉えることができます。

戦慄すべき夜

四、

深川の町並みを吹き抜ける風は、砂埃と溝の臭いが入り混じっていて、ともに吸い込むと気が滅入ってしまう。

堀割の水面にゆらゆらと揺れる月の上を、酔客を乗せた猪牙舟がゆつくりと通り過ぎていった……………。

深川は、水の街だ。

この地は、大川の河口付近にあるため、上方から下ってくる大型の廻船も出入りできたし、小名木川、豎川をはじめとする大小多数の舟入堀が縦横無尽に張りめぐらされ、物資の輸送には何かと便利な場所であった。

そのため、河岸に面した土地には、立派な倉庫が所狭しと建ちならび、町人街の表通りには、米、雑穀、油、干鰯などを扱う問屋がずらりと軒をつらねていた。

吉屋は、元禄の頃より代々佐賀町にあつて下り物の水油（菜種油）を扱う老舗の仲買問屋で、十年前の天保の改革で株仲間が解散になった後も、問屋仲間のあいだではちよつとした顔であった。

何の音かしら……………？

お玉は、夜具に横たわつてからもう一刻ほども寝付けないまま、干潟に取り残された魚のように何度も寝返りをうっていたが、ようやくとうとうと眠気を催してきた頃合いになってその奇妙な音に気が付き、再び目が冴えて眠れなくなってしまった。

どうやら、その音は、この部屋から少し離れた場所から聞こえてくるようであった……………。

もみの木のこずえを揺らす風の音に邪魔されてはつきりとは聞き

取れないが、それは、耳元で蚊が飛び回るような妙に抑揚のある甲高くか細い音であつた……。

猫が盛りの付く季節は、もうとつくに過ぎたのだけれど……。お玉は、取りあえず何か動物の鳴き声だという事で結論づけようとした。しかし、彼女が寝付けない理由がもう一つあつた。

この部屋では、お玉をふくめ、お小夜、お勢の三人が寝ていたのだが　おたきだけ別の場所で寝ている　、お勢が安らかな寝息を立て始めたころ、お小夜が微かな衣擦れの音をさせながらそつと床を抜け出し部屋を出ていったのである。最初、お玉は、お小夜が廁へでも行ったものと思つていたが、しかし、あれからかなりの刻が経つというのに、彼女は一向に戻ってくる気配を見せなかつた……。

お小夜ちゃん、どうしちゃったのかしら……………？

お玉は、思い切つて外に出てみることにした。

十分に寝入っているお勢を起こさないように気を付けながら、そろそろ蚊帳を這い出すと、厨まで行つて汲み置きの桶から水を柄杓やぐらですくつて一口飲む。そして、意を決したように眼差しを強くして、足音を忍ばせながら裏庭の方へ回つてみた……。

吉屋には、裏庭の向こう側に、誰が使っているのかおたきにも分からない、土蔵造りの立派な離れ家がひっそりと佇んでいた。

母屋とは窓のない狭い廊下だけでつながっており、周囲には、まるでその存在を隠すかのようにびっしりと樹木が植えられていた。母屋と反対側は南部美濃守の下屋敷に面しており、手入れの行き届かない武家屋敷の鬱蒼とした木立から張り出した枝葉が、離れ家の柿葺こけいぶき屋根に半ば覆い被さるようにして黒々とせり出していた……。

お玉は、地面から盛り上がった木の根につまづかないよう気を配りながら、暗い庭の中を、わずかな月明かりを頼りに離れ家の方へと近づいていった。

渦巻くような虫のこえが湿った闇を満たしている……。

近寄って見ると、離れ家の締め切った雨戸の隙間から煌々と明かりが漏れ出していた。例の音は、その中から聞こえてくるのだ。

こんな夜分に、何をしているのかしら……？

昼間、おたきから、この離れ家には決して近づいてはいけない、もし見つければ大目玉を食らうと教えられていた。だから、お玉は、そこへ近づく事に多少の罪悪感を感じていたが、しかし彼女は、何かに引き寄せられるように自分の足が勝手に動くのを止めることが出来なかった……。

淀んだ水を湛える庭池の黒い水面を破って、鯉がぱしゃりと跳ねた。お玉は、一瞬びくつと身を竦めて立ち止まったが、しかし、大きく息を吐き出すと両の拳をぎゅっと握りしめて勇気を振りしぼり、低い姿勢になって一歩、また一歩と慎重に歩みを進めていった……。すでに、あの音は、お玉の耳にもはつきりと聞こえていた。

これは、読経だわ……………。

漆黒の闇に朗々と、経を読む合唱が地を這うように流れてくる。

お玉は、そばにあったモミの大樹に寄り掛かるようにしてしゃがみ込むと、猫のように目を丸くして離れ家の濡れ縁を凝視した……。

所謂 妙適清淨句是菩薩位 慾箭清淨句是菩薩位 觸清淨句是菩薩位
位 愛縛清淨句是菩薩位 一切自在主清淨句是菩薩位 見清淨句是
菩薩位 適悦清淨句是菩薩位 愛清淨句是菩薩位 慢清淨句是菩薩
位 莊嚴清淨句是菩薩位 意滋澤清淨句是菩薩位 光明清淨句是菩
薩位 身樂清淨句是菩薩位……………

くぐもった読経の声に絡みつくように、狂おしい男女の喘ぎ声あえが聞こえていた……。

最初は、低く呻くように……そして、次第に高く抑揚がついて……やがて死に直面した絶叫のように甲高い声となり、しばらくすると、また最初の呻き声に戻る……。恐らくは若い男女のものと思われる喘ぎ声が、この過程を何べんも繰り返していた。お玉は、この離れ家の中でくり広げられている何らかの儀式めいたものが、戦慄すべき陰惨たるものである事を直感的に悟らずにはいらなかった。

このまま、ここに居ては危険だわ……。そうだ、おたきさんに知らせてみよう！

彼女がそう思いついたときである。重たい雨戸がカラリと開き、中からあふれ出る灯明の豊かな光量を磨き込まれた濡れ縁が照り返した。そして、その奥にある障子戸の向こう側から、戸板に乗せられた若い男女の裸体がゆつくりと運び出されてきたのだ。その生気なく横たわる女の顔を見て、お玉は、危うく叫びそうになった。

お小夜ちゃん！

戸板の上で仰臥し、目を見開いたまま微動だにしないその月光を浴びた美しい娘は、紛れもなく先刻までお玉の隣で寝ていたお小夜であつた……。

二枚の戸板をそれぞれ四人ずつの剃髪した男達が運んでいた。みな、袈裟を着ているところを見ると僧侶に違いないのだが、男達は仏の慈悲の代わりに近寄りがたいほどの闇をまとっていた。彼らはほとんど物音を立てずに二つの裸体に乗せた戸板を、漆喰しっくいで頑丈に塗り固められた三番倉へ運び入れようとしている。その倉には、先祖伝来の宝物ほうもつが保管されていると、おたきが言っていた……。

「失敗の原因は、何だ……？」

「培養した組織に奇形腫テラトーマが生じたところを見ると、やはりゲノムDNAの塩基配列が完全に初期化されていなかったのでしょうか……」

「……さては、未受精卵の核除去に失敗したか？」

「さあ……、いずれにせよクローンES細胞株の分化暴走を抑えるためには、いまし作業環境を整えなければ……」

「それは、仕方がない。我々は、今ある機材でやり遂げねばならぬのだ……」

「……そうですね。とりあえず、従来通り直接胚盤はいはんほう胞から内部細胞塊を抽出する作業も並行して進めますか？」

「そうするしかないだろうな……。まあ、とにかく、こいつらも免疫拒絶反応を起こしてしまつては廃棄するしかあるまい。また新たな被験マルタ体を探さねば……」

「そうですね。すぐ喜兵衛に手配させましょう」

僧侶達は、何やら訳の分からない会話をしながら薄明かりの灯る三番倉の中へと消えていった。

いまだ！

お玉が、踵を返そうとした、その時である。

「ひっ……」

お玉の叫び声は、彼女の口を強引に覆った大きな齧つい手のひらに封じ込められた。強力な力で後ろから羽交い締めになれ、ぐいぐい後方に引つ張られてゆく。お玉は、恐怖に目を見開いたまま力の限り抵抗したが、圧倒的な腕力の差に制圧され、為すすべもなく裏庭の隅へと引きずられていった……。

お玉は、動揺する気持ちを抑え、下手に抵抗せず大人しくして、ようと自分に言い聞かせた。やがて、彼女が暴れないと知った後ろの男は、覆っていた手を放し、そして怯える彼女の耳元に口を寄せ、囁いた。

「お玉ちゃん、安心して。俺だよ……、平次だよ」

次回へ……。

戦慄すべき夜（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

小名木川の名は、小名木四郎兵衛という人名に由来します。ここに掛かる万年橋の北詰には、かつて松尾芭蕉の庵がありました。彼は、ここで『草の戸も住み替わる代ぞ雛の家』と詠ってから『奥の細道』の発地である採茶庵へと移って行きました。今は、古跡として稻荷社があり『ふる池や蛙飛こむ水の音』と『川上とこの川下や月の友』の二句を刻んだ句碑が建てられています。

惣領の甚六

五、

あーさりいー むき身よあーい…………… あーさりいー 蛤よあーい……………

洲崎十万坪の彼方より朝曇りの空が白々と明けはじめ、アサリを売る棒手振のしほり出すような塩っ辛い声が家々を練り歩くころ、小名木川にかかる万年橋の下に心中した若い男女の死体が浮いた……。

「お小夜ちゃん！」

役人の検分が終わり、辻番所から吉屋に運び込まれた娘の亡骸を覆う筵がめくられた瞬間、お勢は、卒倒したまま気を失ってしまった。

おたがいの手首を赤いひもで結んだまま一緒に浮かんでいた若い男は、日本橋蒼屋町の茶屋が抱える藤伊という陰間であった。着流しの上に羽織のすそを帯にはさみ込んだ定町回りの同心が、吉屋の厨にまで乗り込んできて、二人の関係をおたきにしつつこく訊ねたが、もとより彼女のおずかり知らぬ事であったので一向に要領を得なかった。

結局、二人の死は、将来を悲観しての心中という事で片付けられ、臨川寺から住職がやって来て形ばかりの経を上げると、お小夜の亡骸は、吉屋喜兵衛が包んだ香料と一緒に生家のある日暮里の宮城村まで運ばれて行った。

そして、翌日から、お玉は目の回るような忙しさに追われることとなった……。

吉屋には、あるじの喜兵衛とその家族の他に住み込みの奉公人が二十人近く働いていたが、それら全員分の炊事や洗濯、さらには屋敷内の掃除から諸々の雑用までを、お玉は、おたきと二人だけでこなさなくてはならなかった。お勢は、お小夜の死があつて以来、食事も喉を通らず半病人のようになって毎日念仏ばかり唱えていたがとうとう、あるじに暇ひまを出されて羽田村の実家に引ッ込んでしまつた。

番頭の四郎兵衛が、方々の口入れ屋に頼んでまわつたそうだが、さすがにこう立て続けに奉公人が死んだとあつては、いくら給金はずむと言つても働きにやってくる物好きなどそうそう見つかるはずもなかった。

「お玉ちゃん、あんた顔色悪いよ……。少し休みなよ、あとは、私がやつておくからさ」

華奢わじゃなお玉の体を氣遣つておたきがそう声を掛けてくれるのだが、現実的な見地に立つてみて、その言葉に甘える事など、どだい無理というものであつた。いかに、おたきが太塩平八郎なみの根性を持つた剛の者であつたとしても、たった一人で、この盆と正月が一緒に來たような忙しさをこなせるわけがない。

お玉は、毎日、独樂鼠こまのように立ち働きながら、次第に、あの戦慄すべき一夜の出来事を忘れていった……。

あの夜……、平次は、怯えるお玉に向かつて、
「いいかい、お玉ちゃん、よく聞いておくれ……。今夜見た事は、一切他言してはいけない。見なかつた事にするんだ。君が関わり合つてはいけない事なんだ。絶対に、たとえ親にも言わないでほしいいいね……」

と何度も念を押した。これは、もとより彼に何か考えがあつての事だろうと考えたお玉は、軽い接吻と引きかえに、彼の言う通りにする事を硬く約束したのであつた。

だから、お玉は、あの妖しい月明かりの夜に離れ家から聞こえてきた読経や男女の喘ぎ声のこと、さらには、その中からぞろぞろと出てきて三番倉に消えていった不審な僧侶達のことを、役人には黙っていたし、ましてや、主人の吉屋喜兵衛や番頭の四郎兵衛にも話してはいない。

しかし、日が経つにつれ、やはりおたきにだけは教えておいた方が良さだろうと思うようになり、ずっとその機会をうかがっていたのだが、日々の仕事に忙殺される中、いまだにその話を出来ずにいたのである……。

潮来^{いたこ}おー 出島の 真菰^{まこも}のお中にい あやめ 咲くうー とおーわ
あ しおらあーしいやあ……………

海辺大工町から、小名木川を下って大川に乗り入れた流しの小船^{みずぶね}が、水棹^{きし}の音を軋ませながら吉屋のある佐賀町に面した河岸をゆつくりと通り過ぎた。朱夏の薰風に乗って、枯れたような船頭唄が水面を這って流れる。

「ちよいと、船頭さん。あんた、いいノドしてるじゃあないか」

青菜と酒樽を積んだ平ら舟の上で荷に寄り掛かかって、松江太夫は、艫^{とも}に立つ船頭の人なつっこい顔を斜^{はす}に見上げた。全身飴色に陽焼けした老船頭は、齒のまばらな大口をつり上げて、さも嬉しそうに笑った。

「へっへっ、止せやい、年^{とし}よりをからかうもんじゃねえ……。俺あ、これでも遁世だぜ……。それより、お前さんの方こそ見立て番付に載せたくならない女じゃねえか……。色の白いは七難隠^{しちなん}すつてえが……。俺も、くたばる前に一度でいいから、お前さんのようないい女に惚れられてみてえもんだ……。」

「ふん……。あんたが、あと三十若けりや考えてやるさ……。でも、気を付けな。美女は命を絶つ斧って言うよ」

「へっ、自分で言つてりゃあ世話ねえや」

松江太夫は、形の良い両眉に軽く垂らした切り前髪を揺らしながら、ふんとそつぽを向いた。その拍子に、吉屋の屋号が入った大きな倉が彼女の視界に飛び込んでくる。彼女は、小首を傾げながらも一度、船頭を見上げた。

「ねえ……、あそこに見える、吉屋つて油問屋の倉だけとさあ……。屋根るところが何やらきらきら光っているけど、ありゃあ一体どういう趣向だい？」

「……ああ、あれか。俺もよくは知らねえが、吉屋のあるじつてえのは、きつと通人^{つう}なんだろう。金に飽かせてあんな事しやーがつてよ……。先代の佐右衛門さんは、手堅い商いをする真面目な人だったがなあ……」

「へえ……、じゃあ当代は、ぼんくらつて事かい？」

船頭は、腰にぶら下げていた手拭いを掴んで顔の汗を拭いながら、歯ぐきを剥いてへらへらと笑った。

「へっへっへ……、ようするに、惣領^{そうりょう}の甚六^{じんろく}つて奴よ。バカじゃあねえけども、まあ……お人好しの世間知らずてえところだな」

「世間知らずねえ……」

淙々と流れる大川の水面には如意宝珠のように銀光が揺らぎ、松江太夫は、まぶしそうに長いまつ毛を伏せながら、はあと軽くため息をついた。そんな様子を見ていた船頭が、ふと思いついたように口から泡を飛ばしながら話をつないだ。

「そうそう！　ありゃあ八年くれえ前の事だったかなあ……。牛込の宝泉寺境内から八百両もの大金が入った壺が掘り出されてよう、世間じゃ大騒ぎしたもんだ……。その後は、古い寺社地^{うやんく}あとを掘り返す連中があとを絶たなくなつてなあ……。吉屋にも胡散臭^{うさんく}せえ山師が大勢出入りするようになって、彼らの言うがままに、大枚はたいて方々の土地を掘り返したらしいが……出たのはため息ばかり……」

つてな」

「埋蔵金を探して、逆に金を損してりやあ世話ないねえ……」

船の舳先にトンボがとまり不思議そうな顔でしきりに首を捻っていたが、その頭上を燕の黒い影がついっと掠めると、慌てて夏空へ飛び立った……。

「一時は、もの凄えお宝を掘り当てたつてえ噂にもなったがよ……、ありゃあ、きつと負け惜しみに吉屋が流した作り話だろうぜ。へっへっへ……」

船頭は、ひとしきり笑うと満足したように鼻をすすり、そして、再び枯れた声を絞り出しはじめた。

隠しい社すれー 早乙女もー 水があ 濁らあざあー おかしいか
ろお……………

河岸の土手から、稚児を背負つて子守をする少女が、二人の乗る船に向かって大きく手を振るのが見えた。松江太夫は、その背中の稚児をあやすように 見えるはずもないが 戯けた仕草で百面相をして笑った。途端に、どこからともなく湧つ垂れのカキどもが集まつてきて、船に狙いをさだめ、歓声を上げながら一斉に草矢を放った……。

「永代橋を過ぎたところで、この積み荷をすっかり下ろしちまうが、お前さん、どうする……?」

「あたしも、そこで降りるよ……。世話になったね」

松江太夫は、つまらなさそうに紺碧を遊ぶ鰯雲を見上げていたが、やがて、切なくため息をつきながら、ぷうつと小さく放屁した……。

梅雨もすっかり明け、三日前には初鰯を聞いた。半夏生を過ぎ、季節は、そろそろ七夕にさしかかろうとしている……。

「あたしは、松江ってんだ。ひとつ、よろしく……」

お玉がそろそろ体力の限界を感じはじめたころ、その不思議な娘は、新しい奉公人として吉屋にやって来た。猛暑がちりちりと項うなじを炙る、気怠い昼下がりのことであつた……。

次回へ……。

惣領の甚六（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

江戸時代的美顔パツクは、米のとぎ汁の沈殿物だそうです。娘たちはみな色白美人になりたいと必死に頑張っていたのでしょう。江戸の街には評判娘というのがいて浮世絵の題材にもなったりしています。有名どころでは、鍵屋のお仙、高島屋のおひさ、蔦屋およし、堺屋おそで、笠森お仙、難波屋おきた、などがいましたが、鈴木春信の絵などで見えるかぎり現代美人のイメージとは程遠いようです。

紙屋の佐吉

六、

「……きしょうめえ！」

敵^{いか}ついで狙いをさだめ、藤次は、自分の首根っこをぴしゃりと打った。

「深川つてえところは、何でも蚊が多いんだ？ 俺の血いなんぞ吸つても、うまくも何ともねえだろうによ………ええい、このっ！」

再び、自分の横つ面をぺしつと張つてから恐る恐る手のひらを眺め、そして彼は、勝ち誇つたように会心の笑みを浮かべた。

「へっ！ ざまあ見やがれてんだ」

陽もすっかり傾いた永代橋には、それでも足早に行き過ぎる通行人が後を絶たない。

元禄のころ架けられた大川第四番目のこの橋は、今では幕府財政難のため渡橋銭を徴収し、町民によつて維持、管理されていた。橋を渡る者は、南北のたもとにある詰め番所から番人が竹竿に括り付けて差し出す^{さしだす}策に、銭二文というものをちゃりんと投げ入れて通るのである。

吉屋のある佐賀町は、この永代橋のたもとにあつた。

広小路には大勢の人馬が行き交い、茶店や露店などが軒を連ねている。藤次は、早朝から顔見知りである心太^{こころだ}売り屋台の横に陣取つて^{むしろ}筵を敷き、そこに商売ものの刻み煙草が入った桐の箱を置いて、ぶかり、ぶかり、とやりながら、さりげなく吉屋に怪しい人の出入りがないか見張つていたのであつた……。

「よう、藤次。遅くまでご苦労だな」

背後から、喉をつぶした講釈師のような、しゃがれた声が藤次を呼んだ。

彼が煙管をくわえたまま視線だけ後ろに向けると、そこには、背が低くてつぷりと腹の突き出した貫禄ある壮年の男が、四角い顔をいつそう角張らせて笑っていた。裾すその短い縞柄小袖を尻しりつぽつ端折りにした上から無紋の黒羽織りを着て、帯の後ろには、燻いぶし銀の房なし十手を挿している。

深川一帯を縄張りとする岡っ引き、紙屋の佐吉であつた。

「ああ、こりゃあ親分……。おつ、忠次郎の旦那もおそろいですか。こりゃ、ご苦労さんで……」

そう言いながら立ち上がって、藤次は、腰を屈めたままぺこりと頭を下げた。

佐吉と一緒にいたのは、南町奉行所の渡辺忠次郎という同心である。まだ若い、すらりと背の高いちよつとした男つ振りの美丈夫で、小銀杏にした鬚まげが涼しげな目元によく似合っている。深川八幡横手の大新地あたりにくり出せば、娘達がきやあきやあ騒ぐこと請け合いだ。

「どうです、何か収穫がありましたか？」

忠次郎が間のびした声で訊いた。着物に香を炊きこんでいるのだろつ、何やらとても良い匂いがする。

「……それが、どうも」

藤次が情けない顔をして、後頭をぐしゃぐしゃと搔いた。

「あれだけの大店になりやすってえと、人の出入りも、まあ半端じやあございませんので……。いざ、怪しいと思やあ、誰も彼もみんな怪しく見えちまうし……。そうでもねえと思やあ、全て自分の気の迷いと腹あ括ちちまう始末でして……」

「おいおい、しっかりしてくれよ……。煙草屋の藤次と言やあ、俺が抱える手下てかの中でも一、二を争う知恵者のはずだぜ」

腕組みしながら笑う佐吉に対して、「面目ねえ……」と藤次は、頭をたれた。

「……そろそろ店じまいのようですね」

吉屋では、手代や丁稚^{てうぢ}たちが慌ただしく店の前を片付け始めていた。その様子に涼しげな視線を投げかけておいて、忠次郎があっけらかんとした口調で言った。

「藤次さん、夜通し張り込むつもりですか？」

「へえ……、まあ……」

「なんせ大事^{でえじ}な一人娘が奉公に上がっているからなあ……、四人も死人が出ちまつてるんだ、他人事じゃあるめえ……」

そう言つて、佐吉がまた笑った。

この男は、顔の輪郭が四角いわりに目鼻立ちが妙に整然としていて、藤次の妻のおりくに言わせれば”将棋盤のような顔”なんだそうだが、笑うとその”将棋盤”がシワだらけになつて、とても愛嬌のある風貌になる。その愛嬌のある顔が「おっ！」と言った。

吉屋の、間口が十二、三間^{けん}ほどもある表の土間では、奉公人が総出で大戸を立て始めていたが、その脇にある路地木戸をくぐつて、大柄な手代風の男がのっそり現れたかと思つと、表通りを東に向かつて早足に歩き始めたのだ。

「あつ、こん畜生！ あの野郎は、平次じゃあねえか。くそつ、あいつめ……。店の中じゃあ毎日、お玉といちやいちやいちや乳繰^{ちくく}り合つてるに違えねえんだ……」

と頭から湯気を立てて地団駄ふんでいた藤次であつたが、尻っからげして威勢良く毛ずねを晒^{さら}すと

「ちよつと、あつしが行つて、とつちめてやりやす！」

そう言つて今にも駆け出しそうな勢いであつたので、あわてて佐吉が止めた。

「おいおい、待ちなつて！ あの男にや、ちょうど以前から内々に訊きてえ事もあつたんだ。お前が行つたんじゃ話がしっちゃかめっちゃかになつちまう……。俺が行くから、お前はここで大人しく張り込みを続けてな」

そして、忠次郎に「それじゃあ、あつしは、これで……」と言いつ残すと、深川一帯を治める岡つ引きの親分は、すでに黄昏れ始めた表通りを、肩で風を切つて雑踏の中に消えていった……。

「べらぼうめえ……。江戸のかたきを、長崎で討ちそこねちまつた……。」

後に残されがつくりと肩を落とした藤次に、忠次郎がにっこり笑いかけながら間延びした声で言った。

「果報は寝て待て……。つて言つじやないですか」

次回へ……。

紙屋の佐吉（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

老朽化が進んだ永代橋は、文化四年八月、富岡八幡宮の祭りに押し寄せた見物客の重みにたえられず、その一部が崩壊して千五百人の死者を出しました。群衆の混雑に紛れて巾着切りが横行しましたが、財布をすった者が死に、すられた者が助かって、その財布が元の持ち主へと戻ってきたなんて事もあったそうです。

真言立川流

七、

「真言立川流だあ!？」

伊助は、口まで持つていきかけた湯呑みを止め、くちやくちやくと咀嚼そしゃくしていた蕎麦そばをそのままごくりと飲み下した。

「その、平次つてえ野郎がそう言ったのかい？」

「そうなんですよ。いやあ、強情なやつでした……。あつしが、あの手この手で何とか話を引き出そうとしたんですがね、やっとそれだけを喋しゃべったと思ったら、あとはもう石地藏みてえにダンマリを決め込みやがつて……」

岡っ引きの親分、紙屋の佐吉は、腕組みしたまま四角い顔に泣きべそをかいたような笑みを浮かべて、へっへつと自嘲気味に笑った……。

うわーんという蝉時雨せみしぐれが夏空をおおい尽くし、それを耳にする者の五体から力を奪い去る……。

思わず目眩めまいのしそうな陽気に、冷たい蕎麦そばを食べたくなるのは人情というものであるう、洲崎弁天前にある伊勢屋伊兵衛店では、暖ぬ簾れんを掛けた直後から仕事の合間に盛り切りの蕎麦をたぐろうという江戸っ子であふれかえっていた。

江戸前の蕎麦は、喉ごしをたのしむ。

うどん粉や山芋などをつなぎに使って練った蕎麦切りを、かつお節のダシと銚子の濃口醤油で味付けしたツユにちゃんと付け、あとはほとんど噛まずに丸飲みするのだ。このとき喉を通るツルつとした食感が、粹つうを自負する江戸っ子たちにはたまらないそうである。

通ともなると、先に爛酒をたのんでおいて、わざわざ一杯呑んで

温^{ぬく}まつてから、満を持して冷たい蕎麦をたぐるのだそうだ。だから大抵の大きな蕎麦屋には、酒を呑むための座敷が用意されている。暑気払いに、一杯ひっかけながら蕎麦でも食おうじゃないかという伊助に連れられ、伊勢屋の奥にある貸座敷に陣取った佐吉と藤次であったが、陽気のせいですっかり酔いがまわり、頭が冴えているのは下戸の伊助一人であった……。

「とにかくですね、まな板みてえな顔……へっへ、あっしも他人^{ひと}の事は言えませんが、その平べったい顔を強ばらせてようやと喋ったのが、吉屋喜兵衛は真言立川流つてえのにご執心で、えれえ散財してるらしいって事だけなんですよ……」

「なるほどねえ……。しかし真言立川流とは……そいつあまた、何とも厄介な事だな……」

ここで、ようやく伊助は、口の手前で止めていた茶をゆつくりとすすった。そして、陽気のせいか熱い茶をすすったせいか、こめかみにつつと汗を一条垂らすと眉間に深いしわを寄せ、そして何やら遠くを見つめるような眼ざしに徐々に力を込めていった……。

「真言立川流ねえ……」

「あの……、大家さん？」

藤次が心配そうに声をかけながら、蒸籠^{せいろう}の上に冷たくとぐろを巻く蕎麦をたぐり、つるつと喉に流し込んだ。

「一体え、どうしなすったんです？ ねえ……、大家さんてば」

伊助の顔を覗き込みながらえへんと咳払いをする。

「うん？ …… ああ」

有余涅槃^{うゆねはん}のごとき面持ちから、はっと我に返った伊助は、静かに湯呑みを置くと二人の顔をかわるがわる見ながら例の三白眼にぐつと力を込めて、こう切り出した。

「……なあ藤次、お前いさん、真言立川流てえのを聞いた事があるかい？」

「さあ……………、あつしは、初めて聞きやすが」

「……………親分は、どうだね？」

「そ、そうですね……………、やっぱり、真言なんていうからにあ、宗旨の一つじゃあねえかと思うんですが……………違いやすい？」

伊助は、肩をすくめ、ためていた息をゆっくり吐き出しながら首を左右に振った。

「ああ、思った通りだ……………。お前いさん達は、やはり知らないんだね……………」

そう言つて伊助は、手元の湯呑みに視線を落としながら、彼が知る真言立川流の恐るべき実態について語り始めた……………。

真言立川流は、にんかんあじやり仁寛阿闍梨を開祖とする、中世に興つた真言密教の一派であるが、その教義は、理趣経という教典を根拠とし、即身成仏の境地を男女の性的交わりの中に認めるといふはなはだ奇つ怪なものであつた。

密教を守護する女夜叉、だきにてん荼枳尼天に帰依し、祈祷のさいには護摩壇に人間のどくろ髑髏で造つた本尊を祀る。この髑髏本尊は、貴人のものや奇形したものを使うのが良いとされ、それを得るために墓をあばく事さえあつたという……………。

髑髏本尊を造るには、男女の性的分泌液を混ぜ合わせた和合水なるものを何度も重ね塗つた上から金箔を貼り、最後にあご、舌、唇、歯などを肉付けして完成する。

真言立川流は、後醍醐天皇が帰依したことにより一時隆盛を見たが、後に邪宗門であるとして高野山による厳しい弾圧を受け、今では完全に姿を消したとされていた……………。

「だ、男女の和合水ですか……………？」

「ああ、そうだ……………。男の精液すなわちびやくたい白滞と女の経血すなわちつせ赤滞を混ぜ合わせた赤白二滞を、しゅれこうべに百二十ぺん塗るそうだ……………」

「ひや、百二十ぺん？ そりやあまたご苦労な……」

佐吉親分は、固唾を呑む代わりに湯呑みの酒をくいつと一気にあ
おった。

伊助は、おろしワサビを箸でつまんでツユに入れ、よく溶きなが
ら話を続けた……。

「……そうして今度はその和合水でもってだな、髑髏のひたいに曼
茶羅を描きながら、金箔銀箔を何度も貼り重ねて煌びやかな美顔に
仕上げるんだそうだ……」

「へえ……、そいつあ豪勢なもんですね」

気のない相槌を打ちながら藤次が、蕎麦の先にツユをちよんと付
け、ツルつと飲み込んだ。

「おいおい、豪勢とかそういう話じゃないだろ……。しかしまあ、
そんな物を有難がつて拝むような連中だ、恐らく口クなもんじゃあ
るめえ。なんせ祈祷の最中には、坊さんと美女が仏前で交わるって
んだから念の入った話さ……」

そう言つて、伊助は、たぐった蕎麦をツユにたつぶり浸してから
ずるずると吸い込み、口の中でよく咀嚼しながら熱い茶をずずと
啜^{すす}った。

「信は莊厳より起こるって言いますけど、そんな事してバチは当た
らねえのかなあ……」

藤次がまた、蕎麦をツルつと飲み込んだ。

「さあな……。しかし、その男女の交わりによる恍惚境こそが、す
なわち菩薩の境地ってんだから恐れ入り谷の……」

ここで突然、藤次が素^{すつとんきよう}つ頓狂な声をあげた。

「いけねっ！　するつてえと吉屋に奉公に上がつてるお玉の身が危
ねえじゃねえか。ちくしょう、どうして今まで気付かなかったんだ。
ふざけやがつて！　立川流だか横川流だか知らねえが、もし俺の大
え事なお玉におかしな真似をしゃあがったら……」

そう言いながらも藤次は残った蕎麦を全て平らげ、最後に蕎麦湯で溶いたツユを一息に飲み干すと満足げにふうと息を吐いた。

「じゃあ、あつしは今から佐賀町に行つて、吉屋喜兵衛の野郎をとつちめて参えりやす！」

「おいおい、待ちなつて。お玉ちゃんの事なら大丈夫だ、俺がちゃんと手を打つておいたから……。お前さんは軽はずみな真似をせず、自分の出番が来るまで大人しくしてな」

「し、しかしですね、大家さん……」

「おい藤次、伊助さんの言うとおりだぞ。どうもお前というやつあ気が短くていけねえ。吉屋だつて馬鹿じゃあねえんだ、俺達がいま乗り込んでいったつて体よく追い返されるのがオチだろう。ここはひとつ伊助さんに任せてだな、奴らがシッポを出すまで待とうじゃないか」

そうまで言われては我を張ることもできず、藤次は、慚然としたままとっかりと座り直した。

「……………ところで大家さん。さつきから言おう言おうと思つてたんですがね……………」

「何だ？」

藤次は、自分の猪口に酒を注ぎながら拗ねたような目で伊助を見返した。

「大家さんは、蕎麦の食い方が全然なつちやいねえ……。紺屋じゃあるめえし、蕎麦をどつぷりツユに浸して……。そもそも、江戸前の蕎麦つてえのはですね……………」

そこまで言いかけた藤次を、伊助の笑い声がさえぎった。

「はっはっは！ 分かった分かった。よしよし、まあ聞きなさい……。うちの長屋に弥太つてえ駕籠かきの親爺がいたろう？」

「へっ？ ……ああ、あの先年傷寒そうかんでおつ死んだ因業おやじですかい？ 通つうだとか何だとかぬかしやーがつて、蕎麦の食い方にいちいち講釈をたれる。実あ、あつしも蕎麦の食い方は、あの因業親爺に

教わったもんで……」

「あの弥太がくたばるときにな、やつの女房が”死ぬ前に何か食べたいものはあるか？”と訊いたところ、あいつあ何て答えたと思う？」

「さあ……？」

「死ぬ前に一度でいい……、俺あ、たっぷりツユを付けた蕎麦が食ってみたかった」とさ

次回へ……。

真言立川流（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

理趣経は、れっきとした密教の重要教典で、真言立川流もまた正統に密教を学んだ仁寛によって伝えられた修法です。そこに髑髏天尊のような奇怪な呪法を取り込んだのは、じつは妖しげな民間呪術で生計を立てる外法坊主や拝み屋、巷陰陽師、巫覡といった連中です。彼らは、真言立川流に稻荷信仰や荼枳尼天法といった民間信仰を巧みに取り込み、人々の関心を集めることに腐心したのです。

蓮華阿闍梨

八、

「よし、アンフェタミンを投与しろ」

「はい」

絢爛な僧衣をまとった蓮華阿闍梨が、端正な背中越しに厳かな声で言うと、弟子の僧の一人がすぐに注射器を用意した。そして、恐怖に目をつり上げている娘の白いふとももに、その針の先端をためらいもなく刺し入れた。

「あああ……」

後ろ手に縛られた全裸の娘は、大きく体をわななかせながら身をよじったが、四方から屈強な僧達に取り押さえられ身動きが取れなideいた。やがて、ゆつくりと注射器内の薬液が娘の体内に飲み込まれると、しだいに四肢が小刻みな痙攣を繰り返し、白い肌がほんのりと桜色に染まり始めた……。

「アンフェタミンを10CC、投与しました」

「よし……」

ぱちぱちと護摩木の爆ぜる乾いた音が煙に包まれ、護摩壇から勢いよく立ち上る火焰が明々と、闇の片鱗を舐めては揺れている……。腐乱した果実のように甘い乳木の香りが、朗々とくり返される読経の響きとともに土蔵造りの部屋を満たしていた。

蓮華阿闍梨が、樂樹れんじゆの数珠を左手の指で転がしながら陀羅尼だらにを唱え、もう片方の手で芥子、散香、切り花といったものを八葉形の護摩炉へ投げ入れると、そのたびに、護摩木の上に揺れる赤い炎に毒々しい色彩が加わり、ぱあっと眩く燃え広がった。

羯磨かつま、輪宝、独鈷杵どっこしよ、三鈷杵、宝珠などが整然と並んだ護摩壇には、酒や生米の他に生々しい供物が据えられ、そして、その中央に

は 金色に輝く髑髏^{どくろ}が安置されていた……。

髑髏には、血色のくちびるや白い歯、水晶のように冷たい輝きを放つ眼球などが埋め込まれ、さながら生きているかのごとく醜惡な表情を作り上げていた。

そして、その髑髏がこう言った……。

「雌ノ、被験体カラ、卵子ノ、摘出ヲ、始メテクダサイ……」

その言葉を受けて、蓮華阿闍梨がゆっくりと振り向いた。護摩壇の揺れる炎を照り返したその貌は、鬼面のように残忍な表情を浮か上がらせていた……。

「コルポスコープとバイオリアクターの準備は、出来ているか？」

「はい」

「よし、それでは卵子を摘出しろ」

そう言うってから阿闍梨は、合掌した両手の中指を浮かせて未敷蓮華印を結び、咒を唱えた。

オン ソワハンバ シュダ サラバ タラマ ソワハンバ シュド
カン

黒衣をまとった僧達に押さえつけられ、下肢を大きく広げられた格好でおののく娘の前に、キャスターのついた機械がごろごろと引きずられてきた。その重たい機械からのびるポリエチレン製のジャバラと電気コードの先に、幼児の腕ほどもある機械器具の先端が無機質な金属光を放っていた。

「スコープを被験体に挿入します」

「細胞を壊さぬよう、慎重にな……」

「はい」

阿闍梨の印契が、てのひらを上にして広げる仏頂印に変わる。

オン タッタギャト ドハンバヤ ソワカ

恐怖と恍惚に目を見開く娘の体に何本かのセンサーが取り付けられた。やがてクスコが差し入れられ、器具の挿入口が大きく拡張されると、その中にコルポスコープの丸い先端がゆつくりと分け入った……。

「ああああっ！」

娘の表情に苦痛の色はなかった。体中をかけめぐるアンフェタミンの快感が器具の挿入によって倍増し、菩薩の境地である大楽へと彼女を導いているのである。

読経の声が徐々に高まる……。

弟子の僧が、機械に取り付けられている計器の数値を読み取りながら、せわしくキーボードを叩いている。

阿闍梨の表情が険しくなり、印契がまた変わった。桃色にこぼれる蓮の花弁が、大輪の花を咲かせるさまを思わせる、開敷蓮華印だ。

オン ハンドボ ドハンバヤ ソワカ

娘の体に機械を挿入している僧が、モニターを覗き込みながら何度も手元の位置を変えるたびに、汗に濡れた白い裸体がのけ反った口のはしからは、よだれが糸を引き畳の上にたれている。

「被験体の脈拍、および心拍数が危険値を超えて上昇しています。採取を中止しますか？」

「かまわん、続ける。被験体の代わりなどいくらでもいる……」

娘は、狐憑きにでもなったように白目をむいて、獣のような唸り声をあげ始めた。

「ぐわあああ……、ふうふう……、ひいひい……」

そのようすを見ていた吉屋喜兵衛が感動の声をあげた。

「おおっ！ ついに茶枳尼天の化身、^{びやくしんてん}白辰狐王が天降ったか……」
蓮華阿闍梨がにやりと笑った。印契が両掌を背中合わせに重ねる、

三鈷金剛印に変わった。

オン バゾロ ドハンバヤ ソワカ

「卵子の位置を確認。これより採取を開始します……」

「よし、LEEP電気メスに通電しろ」

「はい」

その時、コルポスコプをあやつる僧が切迫した声をあげた。

「しまった！ 静脈を破損したぞ」

「なに？ 卵細胞が壊れてはまずい、すぐに撤収しろ！」

阿闍梨の指示で娘の体からコルポスコプの先端が強引に引き抜かれた。途端に、大量の血液が真新しい畳の上に飛び散った。

「ぎゃああああっ！」

まな板の上でのたうつ鰻うなぎのように、娘が身をよじって暴れた。その狂乱ぶりに、彼女をとり押さえていた黒衣の僧たちがあせりの声をあげた。

「おい、何とかしろ！ このままじゃ、我らの法衣が血にまみれる」
そんなようすを見ても表情一つ変えない蓮華阿闍梨が、きわめて事務的に言った。

「臭化パンクロニウムを10CC投与しろ」

「は、はいっ」

阿闍梨のかたわらに控えていた僧が、さきほど使用した注射器を使って素早く娘に筋弛緩剤を注入した。ほどなくして、娘は大量に失禁したままぐったりと動かなくなった。彼女を押さえつけていた僧達が安堵の息を漏らしその場から離れる……。

「……よし。あとは、心肺機能が停止するまで塩化カリウムを投与し続ける」

そう言って蓮華阿闍梨は、最後の印契である内縛三鈷印を結んだ。

オン バザラ ギニ ハラジハッタヤ ソワカ

「血圧低下……」

娘の顔色がみるみる青ざめていく。吉屋喜兵衛が遠慮がちに阿闍梨の顔を仰ぎ見て、喉の奥がひっ付いたようにかすれた声で恐る恐る訊ねた。

「……あ、阿闍梨様……ご、ご、これは、一体どういう事でございましょうか？」

「その娘は、なちなりじうく那羅那哩娑樂の果てに西方十万億土を越え、いま、極樂の東門に達しようとしている」

蓮華阿闍梨は、冷笑を浮かべた顔を再び護摩壇の方に振り向けると、乳木を投じながら一心に経を上げ始めた。他の僧達も、それに追従する。吉屋喜兵衛も、青ざめた顔に必死の形相をたたえ、合掌して念仏をとなえた。

「呼吸停止……、脈拍ゼロ……、死亡を確認しました」

「よし、運び出せ」

娘の亡骸は、戸板に乘せられ三番倉へと運ばれていった……。

その一部始終を、天井の梁にへばり付きながらのぞき見ている者があった……。

次回へ……。

蓮華阿闍梨（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

このお話に出てくる機械器具は創作であって、実際のコルポスコ
ープはこんなに恐いものじゃありません。近年では子宮頸癌の若年
化が進んでいるそうです、女性読者のみなさま、定期的に子宮癌検
診を受けましょう。早期発見こそが最大の特効薬なのです。

おたきの悩み、お玉の悩み

九、

「ちよいとお、お玉ちゃん……」

おたきは、今日も機嫌が悪かった。原因は、分かりきっている……。

「あの、おきゃんな娘は、一体どこほつつき歩いてるんだい？ ちよつと使いを頼んだらもう鉄砲玉で……。あたしや長い事このお店で女中頭やらせてもらってますけどねえ……。今まで、あんなにいい加減で、ずばらで、野風俗（のふうぞく）で、はしたなくて、おちゃっぴいで……はあはあはあ……。ちよつとお玉ちゃん、水を一杯ちようだい……」

吉屋に新しく女中奉公に上がった松江は、女のお玉でさえはつとするほどの美人で、しかも婀娜（あだ）っぽく男好きのするような娘であったが、その働きぶりはいいい加減を通り越してもうハチャメチャで、はたから見ていると、返ってすうつと胸のすく思いがするほどであった。

とにかく、おたきがちよつと目を離れた隙にいなくなり、あわて捜しに行ってみれば、あつちで若い手代に色目を使い、こつちで煙管をくわえてぷかりぷかりとやっている始末……。

おまけに、おたきや四郎兵衛などがちよつとでも小言や嫌みを言おうものなら、その倍か三倍くらいになって返ってくるのだ。その啖呵がまた憎いくらいに洒落が利いていて、お玉などは、いつも笑いをこらえるのに必死であった。

このあいだも、おたきが、

「繕い物がだいぶたまってきたねえ……。松江さん、あんた古着の

継ぎ当てくらいは出来るんだろう？ その葛籠くわらうの中に十四、五枚ほど突っ込んであるんだ、針と糸はその桐箆とうへの上の針箱の中だよ。何も着物を一枚仕立てろってんじゃあないんだ。ちゃっちゃと片付けてしまっておくれ」

と、雑巾を絞りながら言うと、松江は大きな欠伸を噛み殺しながら、

「そいつあ、すっぱんが塗り桶を登るようなもんだ、あたしにやあ無理無理……」

と言つて顔の前で右手をひらひら振つてみせた。

おたきは、たちまち目をつり上げ、

「すっぱんが塗り桶とは、一体どういふ見だい？ あんた、あたしを馬鹿にしたら承知しないよ」

と噛み付くと、

「桃栗三年柿八年、梅は酸すいとて十三年…… ってね。あたしや、今まで女中奉公なんてした事あないし、ここに来てまだ一と月経たないんだよ、針仕事なんてそうそう出来るもんか」

と言いながら、へんと鼻を鳴らして開き直つた。さらに、おたきが呆れて口をぱくぱくさせていると、

「人を使うは使われる…… って言うんだ、おたきさん、あんたが先ず繕いの手本を見せておくれよ」

とうそぶいた。

おたきは、茹で蛸のように顔を真っ赤にして松江を睨んだが、当の松江が涼しい顔をして一向に態度を改める様子がないので、ここが辛抱のしどころと仕方なく針と糸を手にした。

「あたしが、まず一枚縫うから……、いいかい？ あとは、あんたがやるんだよ……」

おたきが例の腫れぼったい目にぐつと力をこめてやぶ睨みに睨みながらそう言うと、松江はにつこり笑つて

「耕しに、馬持ちし身の嬉しさよ」

などと言いながら楽しそうに鼻唄をうたっていたが、おたきが古

着の継ぎ当てを一枚やり終えた頃には、とつくにそこから姿を消していた……。

さて、お小夜とお勢がいなくなってから、お玉には、ある一つの悩みが出来ていた。彼女がげっそりとやつれたのは、何も暑さや忙しさのためばかりではなかったのだ。

お小夜の事件があつて以来、おたきは何かとお玉の身を案じてくれ、夜も一人にしておいては危険だと、同じ女中部屋で寝るようになったのだが、そのときお玉は、おたきが今まで一人で寝ていた理由を初めて知る事になる。

鼾いびきが凄いのだ。

まるで、鵯ぬえの鳴き声だわ……。

お玉は、そう思つてぞつとした。

彼女の父、藤次も、酒を飲んだときなどには大きな鼾をかくし、自分だつて疲れたときには、静かに寢息を立てている自信はない。

しかし、おたきの鼾はけた違いであつた。

いくらお玉が、くたくたになつて泥のような眠りに落ちようとしていても、おたきの豪快な鼾はそれを許さなかつた。天地の揺らぐような轟音がお玉の鼓膜をばりばりと鳴らし、耳を塞いでも指の間を通り抜けて頭の芯をぐらぐらと揺さぶるのだ。やがて、眠気と快音にさいなまれたまま意識が朦朧となり、ようやっと気を失うように眠りについたと思つたらもう朝なのである。そうしてまた、お玉にとって目の回るような忙しい一日が始まるのであつた……。

さすがに、これでは体が保たないので、何遍もその辺の事をおたきに伝えようとしたが、元はと言えば自分の身を氣遣つてくれるの事なので、どうしても言えずにいたのだ……。

しかし、松江が来てその問題は、たちまち解決した。

彼女は、寝ぼけた振りをしておたきの頭をしたたか三度も蹴つたのである。四度目のときには、ついにおたきもかんかんになって怒

り、

「こんな寝相の悪い女とは、金輪際、こんりんざい一緒になんかあ寝てやるもんかっ！」

と、夜具を担いで元寝ていた納戸へ戻っていったのである。

以来、お玉は、涙が出るほど渴望していた安らかな眠りを堪能することが出来るようになった……。

しかし、そんな事があってから数日経ったある夜のこと、お玉は、いつのまにか松江が寢床からいなくなっている事に気付き、慌てて飛び起きた。

大変！ 彼女もおの離れ家に連れて行かれたのかしら？

そう思い、急いで蚊帳を抜け出そうとした刹那、障子戸の向こう側から何やら話し声のする事に気付き、お玉は、あわてて息を殺し聞き耳を立てた……。

「じゃあ、結局その娘も死んじゃったんだね？」

「へい……、そりゃあもう、酷い有様でした……」

声の主は、松江と……もう一人、誰か男のようである。

逢い引きしているのかしら？

お玉は、最初なにか艶めいたものを予感して頬を紅潮させたが、やがて話の内容が、あの離れ家で行われている陰惨な儀式のことに ついてだと気付き、次第にその表情を険しくしていった……。

「その坊主どもは、そこで一体何をやっていたんだろうねえ？ それと、その喋る髑髏どくろってやつかい……？ このあたしが、ぜひ、奇術の種明かしをしてやりたいところだけどさあ……」

「とにかく全ての謎は、三番倉の中を覗いて見る事で解けると、あつしは睨んでるんですが……」

「あの”ほうもつぐら”とかいうやつかい？ そうだねえ……、今夜はひとつ、あの中を探ってみようか……」

そのとき障子戸がからりと開き、お玉の猫のように丸い瞳が、松江の驚く顔をしっかりと捉えた。

「松江さん、あなたは一体……………?」

次回へ……………。

おたきの悩み、お玉の悩み（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

” 桃栗三年柿八年” ということわざには別バージョンが多く存在します。首振り三年ころ八年（尺八バージョン）、ぽつぽつ三年波八年（絵描きバージョン）、櫓三年に棹八年（船頭バージョン）、唯識三年、俱舎八年（坊さんバージョン）。ちなみに、ジョージ秋山のコミック『浮浪雲』では” もも膝三年尻八年” となっていました。

倉の中

十、

吉屋の三番倉は、大川から引き入れた堀割に面して建てられていた。

暗い水面には鴨か鴨でも羽を休めているのであろう、時折水を跳ね上げては涼しげな羽音を聞かせてくる。堀は、橋一つくぐるとすぐに、半月を游がせた大川の暗流へとそそいだ……。

「ねえ、太夫……、まだですかい？」

「うるさいねえ……急かすんじゃないよ……急ぎの文は……静かに書けつてえのを……知らないのかい？」

「しかし、こう蚊が多くちやあねえ……えいつ！」

松川鶴吉は、きれいにそり上げた自分の坊主頭を勢いよくぺしつと叩いた。そして、恐る恐る手のひらを覗き、たらふく血を吸った蚊が二匹一緒に潰れているのを見て苦笑した。

「おっと、こいつあ野暮なことをした。二人で仲良く……あれれ！？ こいつら、とつくに俺の血を吸ってやがる」

鶴吉は、松江太夫と同じ見世物小屋で、動物の鳴き声や役者の声色などを真似て人気を博していた。七色の声を操る男と言われ女子供の声まで自由に出せたが、今は自分の低い地声で呪詛の言葉をもらしていた。

「ええい、畜生めい……この分だと俺あ、夜が明けた頃にはお岩さんみてえな顔になってるぞ……。くそつ……。だから嫌だつて言ったんだ、こういう仕事は性に合わないつて……。こういう忍者の真似事みてえなのは、虎之助の兄いか永井の旦那にまかせておけば……」
「うるさいね！ あんたがぶつくさ言うから、気が散って上手くい

かないじゃないかつ」

松江太夫は、三番倉の鍵穴に細い錠前はずしの先端を差し込みながら悪戦苦闘していた。

彼女に叱りとばされて、鶴吉は、うへいと首をすくめた。

「おうい、太夫！ 厠に行ったらこいつがいたんで、引つ括くつてきたぜえ」

見ると、軽業師の早川虎之助が、番頭の四郎兵衛の首根あいくちつこを掴んでこちらに歩いてくる。背中にヒ首あいくちでも突き付けられているのであろう、四郎兵衛は顔を引きつらせてぶるぶる震えていた。

「この野郎、全ての倉の鍵を持ってるらしいですぜ、三番倉の鍵も持っていました」

「そいつあでかした！ この倉の錠前ときたらてんで歯が立たないんだ。あたしや、錠前はずしにはちよいと自信があつただけど、てんでお手上げさ……」

そう言いながら松江太夫は、四郎兵衛のネズミ面にそつと口を寄せて甘い息でこう囁いた。

「番頭さん……、あんた、へたに騒がないほうがいいよ。こいつは、裏の世界じゃちよいと名の知れた香具師の元締めでさ、人殺しなんざあ屁とも思わない奴なんだ。あんた、ちよつとでも騒さわぎ立ててみな。その途端に、ざくつと抉えくられて大川にどぼんだよ」

「お、お、お前は松江じゃないか！ ど、どうして……？ そうか、お前はただの女中じゃないんだな？ い、一体、何のためにこの吉屋にいる？」

「あたし達は町奉行所の手先として動いてるんだ。あんた達のやつている事は、とうに御奉行様の知るところとなつているのさ。本来ならばあんたも獄門首になるところだけど、あたし達に協力するなら与力様に口を利いてやつてもいい。どっちを選ぶかは、あんたの自由だよ。……どうだい、手を貸すかい？」

四郎兵衛は、夜目にも分かるほど血の気の引いた顔を何度も縦に

振った。

「よしよし、良い子だ。そうこなくちゃあね……。それじゃあ番頭さん、まずはこの”ほうもつぐら”の鍵を開けてくんな」

「へ？」

四郎兵衛が素頓狂な声を上げた。

「だから”ほうもつぐら”の鍵だよ！」

「あ、あの……。これは”ほうもつぐら”なんかじゃありませんよ」
虎之助が匕首の刃先を四郎兵衛の首筋にぴたりと押し当てて凄んだ。

「おい手前え、今更しらばつくれるんじゃないぞ。ここが”ほうもつぐら”だって事はとくに調べがついてるんだ」

「ほ、本当です、これは”ほうもつぐら”なんかじゃありません。これはですね……。 ”ぞうもつぐら”なんです……」

今度は、松江太夫たちが素頓狂な声を上げた。

「”ぞうもつぐら”だって？」

「ねえ太夫……。一体えどういう事なんでしょう、 ”ぞうもつぐら”とは？」

訝しがる虎之助の横で、鶴吉が大きくため息をついた。

「お、俺あ何だか帰りたくなってきたよ……」

「……とにかく、中に入ってみれば分かることさ。おい番頭、早く鍵を開けな」

うながされて四郎兵衛が三番倉の鍵穴に不思議な形をしたキーを差し込んだ。ガチャンと電子ロックの解除される音がして扉の隅に”OPEN”の文字が輝く。

「へえ！ こいつあ凝った仕掛けだ。儀右衛門のダンナが見たら喜ぶだろうねえ……」

そう言いながら重たい櫓の扉を押し開けて、松江太夫たち三人は、ぞろぞろと三番倉の中に踏み込んだ。

途端にセンサーが働き、常夜灯のわずかな薄明かりを受けて静まり返っていた倉の内部を、青白い照明がまるで昼間のような明るさで照らし出した……。

「な、な、な、なんだ、こりゃあ!？」

三人は、思わず息を呑んで立ち止まった。

そこには、大小さまざまな円柱状のガラスケースが所狭しと並び、その中には、培養液に浸されて………人間のものと思われる臓器、骨、筋肉、眼球、その他ありとあらゆる体の部分が、紫色の微光に揺れる気泡に包まれながら浮かんでいたのだ。

「ぞ、ぞ、ぞ、臓物倉ーっ!」

慌ててそこから逃げ出そうとする松川鶴吉の襟首を掴んでぐいつと引き戻すと、松江太夫は、「えいつ!」っと力一杯いきんで放屁した。

次回へ……。

倉の中（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

錠前外しには、先が二股になったものの他、掛けがねを外すために直角に曲がった”問外”や、錐のように真っ直ぐな”鎖子抜”、折り畳み式の”刃曲”などがあります。使い方は、車のキーを閉じ込んでしまったときに、JAFの係員さんが外からロックを外してくれるやり方と同じです。

ファクトリー

十一、

吉屋の三番倉は、漆喰で塗り固められた頑丈な壁で出来ていた。
柿葺きの屋根を覆いつくす太陽光発電のパネルが、白く透きとおる半月の仄明かりを照り返しているほかは、ごくありふれた古めかしい土蔵造りである。

しかし、ひとたびその内部に足を踏み入れたなら様相は一変し、壁、床、天井ともに全てが真っ白いエポキシ樹枝で塗装され、まばゆいほどのハロゲン光に満たされていた。

そして、壁際にびっしりと並んだ精密機械と、それを上回る数の生体培養装置が、天井から束になって下りる電気ケーブル群と複雑に繋がっていた……。

松江太夫は、すぐ横にあるバイオリアクターの覗き窓から、中に浮かぶ不気味な物体を見つけて思わず顔をしかめた。装置内部を満たす薄緑色の培養液には、蜥蜴ほどの大きさをした人間の胎児が、臍の緒の代わりのエチレンのチューブに繋がれ、ぷかぷかと漂っていたのだ……。

「おい……、ちょっと番頭、これは何だ？」

ふだんは陽気な松江太夫も、さすがにこの光景には肝を冷やしたようで、険しい顔つきをしていた。

「あたしには、まだ母親の腹ん中にいる嬰兒に見えるけど……」

四郎兵衛は、ずらりと並んだ培養装置のケースに向かって手を合わせ何やらぶつぶつと念仏を唱えていたが、松江太夫の問いに、えへんと大きく咳払いしてから厳かに答えた。

「それは額部曇です」

「あぼどん……だつて？」

「いえアブドン、すなわち命の胞です。男女の結合によつて生じた伽羅藍カラランの白滞から骨が、赤滞から肉が造られ、やがてそれは成長して合掌した胎児の姿となるのです」

「言つてゐる事がさっぱり分かんねえよ。じゃあ、このおびただしい数の臓物は一体何だ？ まさか酢の物にして食おうつてんじゃないだろうね……？」

松江太夫は、ずらりと並んだ円筒形のケースに浮かぶ不気味な臓器の群をさして言つた。

「これは閉戸ヘイシすなわち初肉です。閉戸はやがて鍵南ケンナンとなり、法然自覚、五部の仏智として如来を形作る体の一部となるのです」

この野郎、すっかりイカれてやがる……………。

そのとき松川鶴吉が、部屋の奥に立ち並ぶ大型機械のかけから、悲鳴を上げながら飛び出してきた。

「ひいいっ！ な、な、何か凄いいもんがありますよ。太夫！ 太夫！ っ！」

松江太夫と早川虎之助があわてて駆け寄つてみると、ひととき大きな培養装置の中に、成人した男性の逞しい裸体が悠然と浮かんでいた。濃い眉の下にある双眸は静かに閉じられ、まるで眠つてゐるようである……。

「に、人間じゃあないか……？ おいつ、ちよつと……、番頭……」

松江太夫が呼ぶとすぐに四郎兵衛がやつて来て、その培養液に浸された男に向かい有難そうに手を合わせながら念仏を唱え始めた。

色清淨句是菩薩位 聲清淨句是菩薩位 香清淨句是菩薩位 味清淨句是菩薩位……

「おいこら、お経なんか上げてないで答える！ こいつは誰だ？」

あんた達が殺した男の一人かい？ おいってば！」

すると横にいた早川虎之助があつと驚きの声を上げた。

「思い出した、あいつだ！ この男は、離れ家で一番偉そうに振る舞っていたあの坊主だ。確か”れんかあじやり”とか呼ばれていたぜ……」

すると突然、戸口の方からその蓮華阿闍梨の低く凄みのある声が出て、みなが一斉に振り向いた。

「それは、鉢羅奢伽ハラスヤギヤというのだ……。鉢羅奢伽とは、すなわち清浄なる菩薩の境地、仏果円満ゑんまんの形だ」

「……こいつあ驚いたよ、瓜二つじゃないか」

松江太夫は、培養液に浮かぶ男と戸口に立つ蓮華阿闍梨とを何度も見比べて、感嘆の声を上げた。

「まだ未完成だが、それは私の新しい体だ。何人たりとも近づくことは許さん」

そう言い終わった刹那、蓮華阿闍梨の手元から青白い閃光がほとばしり、一直線に四郎兵衛の体を貫いた。甲高い悲鳴を上げ、バネ仕掛けのように飛び跳ねた四郎兵衛は、そのまま仰向けにひっくり返って白目を剥いたまま動かなくなった。殺された四郎兵衛の体からは何故か一滴の血も流れなかったが、その胸部には、床が見えるほどにはつきりとした風穴が空いていた……。

「ちよ、ちよつと、何て事するんだよ……。こいつあ、あんた達の仲間じゃないのか？」

蓮華阿闍梨は、酷薄そうな唇を三日月の形にして笑った。その側らには左右四名ずつ、十文字槍を携えた僧が凄い形相でこちらを睨みつけている。

「この建物には、誰も近付けると言っておいたのだが……。まあ、昔から使えない奴だったし、いずれは口封じのために殺そうと思っ

ていたのだ」

阿闍梨の手には、不思議な形をした銃が握られていた。四郎兵衛のあつけない死に様からみても、かなりの威力を秘めた武器に違いない。松江太夫は、虎之助にあいくち首を捨てるよう小声で促した……。

「先に忠告しておくが、我々は、お前達などの手に負える存在ではないよ。なにせ七百年も昔からこうして生き続けているし、この先千年もの長きを生き続ける宿命を背負った身なのだから……」

そう言いながら蓮華阿闍梨は、松江太夫たち三人を取り押さえるよう他の僧達をうながした。すかさず黒衣をまとった屈強な僧が四人ほど駆け寄り、手にしていた荒縄で太夫たちの体を縛り上げた。それを見届けてから蓮華阿闍梨はゆっくりとした足取りで倉の中に入り、ガチャンと重たい扉を閉じた……。

「お前たちのような凡人には想像もつかないだろうが、我々は、今からおよそ千年先の未来からやって来たのだ。その時代に蔓延した遺伝病の治療法を探すためにね……。過去のさまざまな時代を旅し、その時代に生きる人間の遺伝子サンプルを採取していたのだ……」

蓮華阿闍梨は、松江太夫の前まで来ると彼女の端正なあごを指でつまみ上げ、ぐいっと自分の方に振り向けた。とたんに彼女の顔に生臭い息が吹きかかる……。

「ところが、ちよつとした事故があつてね……。我々は、元の世界に帰れなくなつてしまったのだよ」

松江太夫は、顔を振って阿闍梨の指を払いのけたが、彼は執拗に太夫のあごをつまんで強引なやりかたで自分の方に振り向かせた。

「我々は、何としても採取した遺伝子サンプルを我々の生きていた時代へ届けたかった……。そして、みなで色々考えた末、その方法はたった一つしかない事に気付いたのだ……。くつくつく……。そう、その方法とは、我々が生まれたその時代がやって来るまで、

ずうつと生き続ける事さ……」

太夫は、もう一度阿闍梨の指を払いのけると、彼の顔を斜に睨みつけながら言った。

「あんたの言ってる事は、ちんぷんかんぷんでよく分かんないよ！人は神様じゃあないんだ、千年ものあいだ生き続ける事なんて出来るもんか」

「確かに……人間の体は、百年とたたないうちにボロボロになってしまふ……。だから我々は………」

蓮華阿闍梨は、突然、身にまとっていた絢爛な金系の僧衣を脱ぎ捨てた。

「こうやって、体の部品をつねに新しいものと交換しながら、数百年という気の遠くなるような年月を生き続けてきたのだ」

「ああっ！」

松江太夫は、驚きの声をあげた。蓮華阿闍梨の体には至るところに縫合の跡があり、その皮膚は、まるで古着のようにつぎはぎだらけだったのだ……。

彼は、両手を大きく拡げて天井を仰ぎ、歓喜の表情で倉の中をくぐりを見渡した。

「ここは、我々のファクトリーだ！日々、我々の体を製造し続ける！我々は、常に古くなった体を新しい部品と交換する事が出来るのだ！」

「……狂ってる」

虎之助が嫌悪のこもった声で囁いたが、松江太夫が厳しい目でそれを制した。その様子を見ていた蓮華阿闍梨は、薄気味の悪い笑みを口元にたたえながら、もう一度松江太夫の形の良いあごをぐいと力任せに掴んだ。

彼女の美しい顔が苦痛で歪む……。

「……しかし、お前達のような無知な輩は知るまいが、生体移植には免疫拒絶反応というものがあってね……、我々は絶えずそれに苦

しめられてきたのだ……。免疫抑制剤を長年投与し続けた事により、我々の生殖機能は完全に失われてしまった……」

蓮華阿闍梨の生殖器は、紫色に変色したまま壊死^{えし}していた……。

「しかし！」

と阿闍梨は声の調子を上げた。その表情は嬉々としながらも、目は死んだ魚のようにどろりと濁っていた。

「我々は、遂に手に入れたのだよ！ 究極の生体をね……。未受精卵に、我々自身の体から採取した体細胞の核を直接移植する事で、ヒトクローンES細胞を造り出すことに成功したのだ。もう、免疫拒絶反応に苦しむこともない。いや、それどころか培養したヒトクローンES細胞をもう一度母体に戻せば、我々自身のクローン人間だって造り出せるのだ！ はーっはっはっは！ 凄い事じゃあないか！ だって、そうだろ？ 我々は、もはや神と同格の存在なのだから！」

恍惚の表情で語り続ける蓮華阿闍梨をしり目に、早川虎之助がぼそりとつぶやいた。

「ねえ、太夫……。あの野郎、さつきから一体何を喋ってやがるんです？」

「さあね……。なんせ、あたしゃ坊主と地頭にだけは逆らわないようにしてるんだ……」

「……………ひよつとすると、俺たちあ、えらいもんに首を突っ込みましたようですね？」

「どうやら、そうみたいだね……………いつもの事だけど……………」

松江太夫は、少しでも縁起^{げん}が良くなるようにと気合いをこめて息んでみたが今度は放屁^{へん}することが出来ず、代わりに、はあと太いため息をついた。

「仕方ないさ……………、これがあたしの性分なんだ」

「だから俺あ、はなっから止めようと言っただんだ……………」

泣き言を口にする松川鶴吉に冷たい一瞥をくれておいて、松江太夫は、勝ち気そうな眉にかかる切り前髪を揺らしながら、ふんとそっぽを向いた……。

「こいつらは、いったん離れ家の方にも押し込めておけ。女は、被検体として卵子を採取し、クローン人間の母体とする。男の方は……そうだな、生体内イン・ビボの実験にでも使おう。どちらにしても、もうすぐ夜が明ける。殺すのは明晩だ。連れて行け！」

「はい」

おいおい、あんまり調子に乗ってんじゃないよ。

松江太夫は、心の中で独り言ちた……。

次回へ……。

ファクトリー（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

ヒトクローンES細胞とは、未受精卵の力を借りてヒトの体細胞から作りだした多能性幹細胞の事で、これを使えば免疫拒絶反応のない生体移植が可能とされています。しかし、未受精卵の使用が倫理的な問題に抵触するため、その代用品としてiPS細胞というのが研究されています。iPS細胞とは、またの名を誘導多能性幹細胞といい、体細胞の塩基配列を未受精卵の力を借りず人工的に初期化して造られる多能性幹細胞の事です。いま、再生医学の最先端技術として注目されています。

からくり儀右衛門

十二、

「あーあ……、太夫たち、とうとう何処かに連れてかれちゃいましたよ」

火の見やぐらのてっぺんに陣取って、永井兵庫が体軀に似合わない甲高い声を出した。

「……よかつたなあ、生きてたみてえで」

やぐらの下の方から、本当に良かったと思っているのかと疑いたくなるような口調で、からくり儀右衛門が欠伸あくびを噛み殺しながら応じた。

いま、二人がいる御船手組おふなての組屋敷は、吉屋のある佐賀町のすぐ南に位置し、そこに設けられた高さ三丈ほどの白木を組んだ火の見やぐらからは、吉屋の三番倉がとてよく見渡せた。南町奉行所同心、渡辺忠次郎の口利きでこの場所に陣借りしてから、もう一刻ほどのあいだ二人は秘かに倉の様子を監視していたのである。

「それにしても旦那、こいつあ便利なもんですね。あんなに遠くにある倉の様子がまるで手に取るように見えちゃう」

兵庫は、円柱形の鏡筒を片目に押し当てたまま、その先に映る景色に感じ入ったように、終始にやけた笑みを浮かべていた。

「ふっふっふ、そうだろう。そいつあ阿蘭陀渡りあらんたの”ぐれり式反射望遠鏡”ってえやつを、俺がさらに改良したもんだ。お月さまにいる兎のツラだってよく見えるんだぜ」

「へっ、ずいぶんとしよつてらあ……。しかし、坊主どもが踏み込んだときにあ、俺あてつきり太夫たちもこれで一巻の終わりだと肝を冷やしましたが、ああしてまだ殺されねえでいるところを見ると、

やはり太夫の悪運の強さは筋金入りですね」

ここでもうやく儀右衛門は、袴に付いた土を払い落としながらのろろと立ち上がった。

「よつこらしよつと……。しかし、感心してる場合じゃねえぞ。早く助けに行つてやらなけりやあ、本当に太夫たちの土左衛門が大川に浮かぶことになる」

「へっへっへ、実あ、吉屋の裏手にある板塀が一箇所だけ外せるように細工してあるんですよ。どうです、これから二人で乗り込んでいつて、ひとつ赤穂浪士を決め込もうじゃありませんか」

「ふむ……。それも、面白いかもしれねえな」

「槍なんか担いでるところを見ると、やつら、ただの坊主じゃあねえ……。こりやあ、久しぶりに大暴れ出来そうな予感がしますぜ」

「おいおい、太夫たちを助け出すのが第一の目的だぞ」

「分かつてますつて。でも旦那……。俺には、いざとなりやあこいつがあるが、旦那は、いつてえ何で戦うんです？」

永井兵庫は、上方の刀工、津田越前守助広の手による二尺八寸の業物を鞘さやごとつかんで立ち上がると、それを腰に差して柄頭をポンと叩いた。彼は、松江太夫の見世物小屋で居合い抜き早技を觀せ人気を集めている。放り投げた造花の枝を「えいっ！」という気合いもろとも見事八つの断片に切り刻むのだ。パチンと納刀した後には美しい花びらがはらはらと舞い、觀客の目を奪うのであった。

「俺は、いままで旦那のやつとうの腕を見た事がねえ……」

「おめえ、俺を誰だと思つてんだ……。俺あ、からくり儀右衛門だぜ、そんな無粋なもん使うかよ」

「ほう……。大きく出ましたね……。じゃあ種子島でもぶつ放そうつてのかい？」

からくり儀右衛門は、口の右端をにいつとつり上げて笑った。

「まあ、そんな所だが……。細工は流々、あとは、仕上げを御覧じ
ろ……。ってな。まあ、楽しみにしてな」

次回へ……。

からくり儀右衛門（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

津田越前守助弘は、大阪正宗と称された井上真改と並んで上方鍛冶の双璧と言われた刀鍛冶です。京都一条から興った堀川国広の流れをくみ、型にはまらない独特の作風で多くの刀工に影響を与えました。また、新撰組の近藤勇が愛用したことも知られる長曾祢虎徹は越前の鍛冶師ですが、彼もほぼ同時期に活躍した刀工の一人です。

罰體本尊

十三、

「痛てて、痛ててて……」

「どしたい太夫、癩しやへでも起こったかい？」

「……へっ、どうせ片腹痛いと言っんでしょ？」

荒縄で、ぐるぐると縛り上げられたまま額に脂汗を浮かべ、蛇のようにくねっている松江太夫を、早川虎之助と松川鶴吉の二人が投げやりな口調でからかった。

三人は、吉屋の離れ家に押し込められ、手足を嚴重に縛られたうえで湿気った畳の上に無造作に転がされていた。辺りには辛気くさい線香の匂いが立ち込め、ふだんから雨戸を立て切っているのである、息苦しく淀んだ空気に満ちていた。

夜が明けるまでには、まだ四半刻ほどある。

小さな格子窓から差し込む仄明かりが護摩壇に並ぶ法具の数々をぼんやりと照らし出し、漆箔しっばくのごとく闇に金や銀の輪郭を浮かび上がらせていた。

「て、てめえらなあ……。あたしや、いま縄抜けするために肩の関節を外してるんだ、茶化すんじゃないよ、こん畜生め！」

そう言っつて松江太夫は、苦悶の表情に渾身の力を込めて身をよじりながら切ない呻き声を漏らした。

「……………あの生臭坊主どもめ……念入りに縛りやがって……畜生、今にどうするか……覚えてやがれ」

そう呪詛の言葉を漏らし、その後もしばらくのあいだ「痛てて」「畜生」を繰り返しながらくねっていたが、最後には何とか自力

で縄目を解くことに成功した。

「ふう……、玉の肌に痛々しい縄の跡がついちまった」

彼女は、一度大きく深呼吸してから外した肩の関節を入れ直すと、二の腕に激しく食い込んでいた縄の跡を指でさすりながら安堵の吐息を漏らした。

「おつ、太夫、まんまと縄を抜けたようじゃねえか。さすがは松江太夫だぜ。さつ、早ええとこ俺の縄も解いてくんない」

「へっへっへ、助かった。俺あ、そろそろ辛抱が切れてきたところだつたんだ。ほんつと太夫は頼りになるねえ……」

薄闇の中から二人の喜ぶ声が聞こえたが、松江太夫は、あえてそれを無視して護摩壇の方へ向かった……。

秘境に埋もれ、風化した古代寺院のようにその機能を停止して静まりかえる護摩壇は、その陰々滅々たる雰囲気の中にも、やはり底知れぬ摩訶不思議な力を秘めているように感じられ、松江太夫は、思わず肩をすくめてぶるつと身震いをした。

”護摩”とはサンスクリット語の”ホーマー”、すなわちバラモン教の火神アグニがもたらす火災による一切の浄化を意味している。中央に置かれた護摩炉は、祈願する内容によってその形が使い分けられる。

息災を祈るのであれば円形、金銭的な御利益であれば正方形、怨敵調伏などは三角形だ。そして、今この壇上には八葉形の護摩炉が置かれている……。

八葉形の護摩炉で祈るものは……すなわち男女の和合であった。

「こいつあ、立派なもんだ。油問屋の離れにこんな大袈裟な護摩壇が祀ってあるなんて、こいつあ御釈迦様でも知らぬ仏の……」

そこまで言いかけて、太夫は、思わず息を呑んだ。

……と同時に、彼女の視線は、供物や法具の並ぶ壇上のある一点

に釘付けになったのだ。

「……………お、おい……………これは」

そこには、金色に輝く人間の首があった。

顔も、頭皮も、耳たぶに至るまで全てが黄金色の素材で出来たその顔は、冷たい輝きを放つ水晶のような眼球を半眼にして、まるで瞑想にふける行者のように涼しげな表情を保っていた。

「おい……………虎之助、こいつがあんたの言ってた、喋る髑髏つてやつかい……………」

「……………ああ、その通りだ。そいつがクソ坊主ども相手にあれこれ指示を出しているところを、俺あこの目で見たんだ……………。なあ、そんな事より、意地悪しねえで早くこいつを解いてくれよう」

媚びた目で哀願する虎之助と鶴吉を無視して、松江太夫は、そのヒンヤリとした金属の感触を伝える髑髏の頭部をそつと指先で撫でた。

「こんなものが喋るわけないよねえ……………。きっとどこかに人が隠れていて、こいつが喋ったように見せかけていたんだ……………」

そう言って、松江太夫が力なく笑ったそのときである。

「IDト、パスワードヲ、入力シテ下サイ……………」

「わあっ！　しゃ、しゃ、喋ったーっ！！」

松江太夫は、でんと尻餅をつくと、そのままの格好でザザッと畳の上に尻を滑らせながら勢いよく後退った。

「ば、化けもんだっ！　しゃれこうべの化けもんが喋ったっ！　おいっ！　おい、どうするよ！？　おいってば……………」

彼女は、芋虫のように縛られて身動きの取れない早川虎之助に取りすがると、その体を両手で激しく揺すった。

「おい、こら寝てないで起きろ、虎之助！　しゃれこうべが喋ったんだぞ！　あの、しゃれこうべが……………」

「ひゃひゃひゃ！　太夫、止めてくれ、くすぐったいってば！」

大騒ぎする彼らを前にして、髑髏に埋め込まれた眼球がキューンというモーター音をさせながらゆっくり視線を巡らせ、やがて恐怖におののく松江太夫の顔にピタリと焦点を合わせた。

「医療処置が必要なカタハ、EDト、パスワードヲ、入力シテ下サイ……」

次回へ……。

髑髏本尊（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

髑髏本尊にするしゃれこうべは、誰のモノでも良いという訳ではありません。一番良いのは学識のある高僧のもので、二番目が修行によって験力を身に付けた行者、三番目が国王、四番目が將軍、五番目が大臣となり、その後は、長者、父、母、千頂、法界髑髏となります。千頂と法界髑髏は、複雑な呪法を用いて作り出す髑髏で、墓場から掘り出す日にちや個数が厳密に決められています。

クローニンゲ

十四、

「表に四人……裏にも一人いたな……」

吉屋の裏庭にある石灯籠のかげに身を伏せ、永井兵庫が押し殺したような声で言った。

陽に焼けた丸い顔がいくぶん強ばり、こめかみからふくよかな頬にかけてつうつと生温い汗が伝い落ちる……。

わき上がる虫のこえと堀割を流れる涼しげな水音が、むうつと噎せるような夏草の匂いとともに辺りを押し包み、すでにうつすらと白みはじめた東の空では、家々の^{いらか}薨を並べた地平線が水墨画のような濃淡を見せていた……。

「取りあえず、俺があの人々をやつつけるから……、その隙にあんたは、裏の方にいる奴を斬り伏せてくれ」

そう言いながら、からくり儀右衛門があくびを噛み殺した。

「ちよ、ちよと待つてくださいよ旦那あ、まさか本気でそいつをぶつ放すつもりですかい？」

「当たり前じゃねえか。その為になんぞこんな重たいもんを担いできたんだ」

「だけど、夜中にそんな大きな音をさせたら大騒ぎになるでしょう？」

「ふっふっふ、俺を誰だと思ってるんだ？ からくり儀右衛門だぜ、そのくれえの事はちゃんと考えてるさ。こいつあな、そんじよそこらにある鉄砲とは鉄砲が違うんだ。いまからそいつを見せてやるから、恐れ入って小便ちびるんじゃないやあねえぞ」

儀右衛門が肩に担いでいるのは全長四尺六寸あまり、銃身だけで

も二尺四、五寸はある異形の銃だった。

普通の種子島と明らかに違う点は、火縄、火挟み、火皿といった点火機構が一切無いことである。また、銃床が異常に大きく、二匁玉を込めた弾倉が二つ取り付けられていた。

「これは、圧縮空気の手で弾を飛ばす”風砲”ってんだ。阿蘭陀おらんたから持ち込まれたものに、国友籐兵衛一貫斎という天才鍛冶師が改良を加えたものさ。火薬を使わねえから雨風も関係なく撃てるし、発砲音もごく小さくて済むんだ。へっへっへ、しかも二十連発ときたもんだ！」

そう言いながら膝立ちの姿勢で風砲を構えると、離れ家を守る僧侶の一人に狙いを定め引き金を絞った。

カシャンという鋭い打撃音が闇を裂いた。

次の瞬間、四人いた僧侶のうち一人が短い悲鳴を上げながらもんだり打って宙を舞った。他の三人は、訳が分からず慌てふためいている……。

「どうだ、驚えたか？」

「……す、凄げえ」

「刀を振り回すばかりが能じゃねえってことよ」

からくり儀右衛門は、自慢げに鼻をふふんと鳴らすと口の右端をつり上げてにいと笑った。

「よし、どんどんいくぜ！」

彼が再び風砲を放つと、次の標的となった僧侶は頭を撃ち抜かれ、離れ家の戸板を赤黒く汚しながら踏み潰された虫のように転がった。そして敵は、ようやくこちらの存在に気付いたらしく、何やら口汚く罵りながら十文字槍を振りかざし怒濤の勢いで駆け寄ってきた。「おっと、こっちに來やがるぜ、危ねえ危ねえ。へっへっへ、坊主憎けりや袈裟まで憎い……ってね」

言っが早い、風砲の銃身が重たい反動を伝え、飛び出した二匁

玉が迫り来る敵の一人を襲った。弾丸は敵の胸部を貫通し、撃たれた僧は、あつと槍を放り投げてそのままぱったりと大の字に倒れた。しかし、その隙にもう一人の僧が素早く竹藪の中に飛び込んで姿をくらませたのだ。

「あつ、あれ？ もう片方の奴が消えちまったぞ……」

儀右衛門は、いささか狼狽して竹藪の中へやみくもに銃弾を放ったが、めくら撃ちでは敵に当たるはずもなく、舌打ちしながら風砲の銃身を下ろした。その途端、左手に広がる竹林の陰から先ほどの僧が黒衣の裾をひらめかせ、歯を剥きながら襲い掛かってきた。

「きえーっ！」

獣じみた掛け声とともに繰り出された十文字槍の尖端が儀右衛門を襲った。

彼は長軀を反らせ、すんでのところで攻撃をかわしが、敵は息つく暇を与えず、素早く槍を引くと更に踏み込んで必殺の第二撃を見舞った。

いけねえ！

避けきれないと悟った儀右衛門は、死を覚悟して両目を閉じた。
「えいっ！」

刹那、闇にぎらつと白刃が閃いた。

上方の名刀、津田助広の、俗に濤瀾刃と呼ばれる刃紋が、夜明け間近の薄明かりを反射したのだ。

十文字槍は、儀右衛門の体を貫く前に三つに分断され、からんと小気味よい音をさせて草の上に転がった。

あとには、血飛沫を上げて立ち尽くす敵が、沈みかけた宵月を睨みながら断末魔の呻きを漏らしているばかりであった……。

永井兵庫が愛刀をぱちんと鞘に収めると、その足下に敵がどうと倒れるのが同時だった……。

「どうです、旦那？ 居合いの技も、まんざら捨てたもんじゃない

でしょう」

「……………そうだな」

儀右衛門は、青ざめた顔から滝のように吹き出す汗を何度も手のひらでぬぐった。

「よし、さつさと皆を助け出そう。そろそろ吉屋の奉公人たちが起き出す刻限だ」

儀右衛門は、松江太夫たちを救出すべく離れ家の障子戸を蹴倒して中に突入した。しかし、縛られているはずの三人は、頭を寄せ合い何やら神妙な面持ちでひそひそと話し込んでいた。

「あれ？ お前えら無事に縄を抜けてるじゃねえか。畜生、無理して助けにくることなかったぜ。おかげで、こっちあ死ぬ目に遭ったんだ」

「おやまあ、儀右衛門の旦那、ちょうど良いところに来てくれたもんね。ちよいとこれをご覧になってよ」

松江太夫の膝の上には、金色の髑髏が大切そうに乗せられていた。その髑髏が儀右衛門に向かって言った。

「ＩＤト、パスワードヲ、入力シテ下サイ……………」

「な、何だ、こりゃ……………」

「さつきからこれしか言わないんですよ」

「医療処置が必要ナカタハ、ＩＤト、パスワードヲ、入力シテ下サイ……………」

「一体、何の事だか分かります？」

「うーん……………阿蘭陀や英吉利の言葉なら少しは分かるんだが……………それにしても面白いなあ、生首が喋るなんて……………。一体どういう仕組みになってんだ？」

儀右衛門は、松江太夫から髑髏を受け取ると興味深そうにその顔や頭部を撫で回した。

「坊主ども、こいつの言う事をいちいち有り難がって聞いていたそうですね」

「ほう……、鰯^{いわし}の頭も信心から、というやつか？」

そんな様子をぼんやり眺めていた松江太夫が、不意に何かを思いついたように言った。

「ねえ鶴吉、あんた、この声が出せるかい？」

「この声って……どの声？」

「じれったいね、この声だよ！」

「IDト、パスワードヲ、入力シテ下サイ……」

同じ頃、離れ家の裏手では永井兵庫が、蛇に睨まれた蛙のように脂汗を垂らしていた……。

こいつあ、いけねえ……。この野郎は、あの生臭坊主なんかとはわけが違うぞ……。

彼が対峙しているのは、垢じみた小袖と野袴に身を包んだ浪人風の男であった。

ぼさぼさの蓬髪が陽に焼けて縮れ上がり、伸び放題の汚らしい髭が冷酷そうな口元を覆っている。猛禽のようにつり上がった瞳は、涅槃^{ねはん}図の釈迦のように半眼を閉じたままどこか遠くを見つめていた。そして、右手にだらりと下げた切れ味の良さそうな抜き身が、うつすらと白みはじめた夜明け間近の闇に不気味な反射光を送っていた……。

俺あ、今まで名人上手とうたわれる人間を大勢見てきたが、こんなにモノ凄いやつあ初めてだ……。よくて相討ち……。下手すりゃあ、俺の素っ首が胴から離れて地べたを転がるぞ……。

男の剣気に飲まれながらも、永井兵庫は、渾身の氣力を振り絞って刀の柄に手をかけた。

「やめておけ」

地底から沸き上がるような声だ。

「貴様のごとき腕で、俺を斬れるはずがない……。何故なら、この

俺の体には、究極の三剣士の遺伝子情報がクローニングされているのだ」

「なにおう！？ 苦労人なあ？ へっ、笑わせるない。自慢じゃあねえが、こちら、おぎゃあと生まれ出てから今日の今日まで苦労のしっぱなしよ！ べらぼうめえ！ 四の五のぬかしてねえで、とつと掛かってきやがれ！」

永井兵庫は、大きく踏み出して斬撃の間合いに入ると、抜き打ちの太刀を一閃させた。

なむさん！

男がにやりと笑った……。

兵庫には知る由もなかったが、この男の体には、塚原ト伝、宮本武蔵、伊藤一刀斎という伝説的な兵法者のゲノムDNAがコピーされていたのだ。

「やつ！」

白刃が風を切って唸り、打ち上げ花火のように夜空に血煙が舞った。

「うぐ……」

倒れたのは男の方であつた……。

彼は、刀を振り上げることもなく木偶のように斬られて夏草の上に沈んだのである。

あまりの手応えのなさに、兵庫は、あっけに取られたまま、しばしのあいだ目を瞬かせていた。

「な、なんでい、拍子抜けするなあ……。見かけばかりの空大名ってやつか？」

居合いの勝負は、一瞬で片が付く。

それは、頭で考えて行うものではない。敵の刀の軌道を視覚でと

らえ、その対処法を脳で分析してから行動したのではとうてい間に合わないのだ。

敵が動くとほぼ同時に、こちらでも反射的に動いていなければならぬ。

頭ではない、おのれの体に刻み込まれた遺伝子の記憶そのものが直接、五体突き動かすのだ。

今、逆袈裟に斬り上げた永井兵庫の攻撃に対し、男の体内に宿る三人の兵法者の遺伝子が反射的に指示を出した。

塚原卜伝は、半歩退いて敵の刃をかわしざまにその手首を斬り落とせと命じた……。

宮本武蔵は、敵よりも一瞬早く踏み込んで車から回した太刀で胴を両断せよと命じた……。

そして、伊藤一刀斎は、半身になって敵の太刀を受け流し、返す刀で敵の頸動脈を一閃せよと命じたのであった……。

同時に、異なる三つの指示を受けてしまった男の体は、結局、三すくみとなり、動きを封じられてしまったのだ。

船頭多くして船山に上る……、彼は、この諺を遺伝子レベルで実践してしまったのであった……。

「けっ、馬鹿馬鹿しい……」

次回へ……。

クローニンゲ（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

風砲とは、いわゆる空気銃のことです。ニュールンベルグにおいて戦争目的で開発されたのは17世紀初頭のことですが、初期のもの1発目を発射すると圧縮空気が減少してしまい2発目からは射程距離、命中精度ともに半減したため戦争ではあまり使われなかったらしいです。日本では、文政元年に国友村の鍛冶師である一貫斎がオランダより將軍に献上された風砲をモデルに、弾の威力を落とさずに20連発できる風砲を開発し評判となりました。技術屋魂によってオリジナルより優れたコピー商品を作るのは、当時から日本の十八番だったのですね。

お父つつあんの遺伝子

十五、

「ちよつと、お玉ちゃん！ あんた、どうして今までその事を黙ってたんだい？」

女中部屋のすり切れた畳の上でお玉と膝を突き合わせながら、おたきが例の腫れぼったい目にぐつと力を込めた。

「水くさいじゃないか、あたしゃ、何かあつたら直ぐに相談しなつて言つたはずだよ」

お玉は、俯いたまま消え入りそうな声で答えた。

「ごめんなさい……、あたし、平次さんに口止めされていて、それで……」

おたきは、子供の頃から目付きが悪い。

普通にしているても何だか怒ってるみたいだし、笑ってみてもちつとも嬉しそうに見えない。でも、彼女と付き合いの長い者なら、やぶ睨みの瞳のその奥が暖かい慈愛の光に満ちている事に気付くはずだ。

「うちの旦那様にも困つたもんだ。道楽で散財してるうちはいいけれど、妖しげな連中と付き合つて御上に目を付けられるようじゃ、この吉屋もどうやら先が知れたね」

「妖しげな連中……… おたきさんは、あのお坊さまたちの事を御存知なんですか？」

庭でキリギリスが鳴きはじめた。

「さあねえ、どこの寺から押しかけてきたものか………」

おたきは、太い腕をゆつくりと胸の前で組み、表情を曇らせたま

ま目を閉じた。

「……八年ほど前になるかねえ、旦那様が古い寺社地址から奇妙なものを掘り出してさ、何でも黄金で出来たしやれこうべだつていうけれど、それが結局何だったのか、あたしや知らないんだ。でも、その直後だったねえ……やつらがこの吉屋にやって来たのは……。あたしやあね、一目見て胡散くさい連中だと分かったよ。だけれど旦那様は、やつらに心酔し、結局、あの離れ家に住まわせることにしちゃったのさ……」

「奉公人が亡くなり始めたのは、その時からだったんじゃないですか……？」

「そう言われてみれば、その通りだねえ……。もっと早く気付くべきだったよ」

「……もしかしたら平次さん、何か良からぬことに巻き込まれてるんじゃない？」

「さあ、それはどうだか……」

おたきは、ちょっと眉根をよせて考え込んでいたが、やがて太いため息をついて立ち上がると、お玉の肩にぽんと手を乗せた。

「ちよつと平次さんに事情を聞いてくるよ。お玉ちゃん、あんた、この話のケリが付くまで、いったん実家に帰ってな」

「えっ？　でも……」

「もし、あんたの言う通り、うちにいた女中があ坊主どもに殺されていたとしたら……。そして、あの松江とかいうおきやんな娘が御用の筋の者だったら、この先、きつともう一騒動あるに違いないさ。その時あたしや、あんたを守ってやれる自信がないよ。だからさ……旦那様にはあたしが話しておくから」

そう言い残すと、おたきは、お玉の返事を待たずに部屋を出ていつてしまった。

お玉がどうしたものかと考えあぐねていると、入れ替わるように吉屋喜兵衛が、その憔悴^{せうすい}しきった血色の悪い顔を覗かせた。

「ちよつと、お前、番頭の四郎兵衛を見なかったかい？」

「あつ、旦那様、おはようございます。今日は朝から見掛けておりませんが……」

「そうかい、この忙しいのに困った奴だ。あんた……お玉さんだつたね？ 悪いが番頭を探して私が呼んでいたと伝えてきてくれないか。おそらく倉の方にもいると思うんだが……」

そう言い残すと、喜兵衛もまた、お玉の返事を聞かずにそそくさと廊下の向こうに消えてしまった。後に残されたお玉は、困惑したとき無意識にやっってしまう小さい頃からのくせで、しきりに自分のほつぺたをつねっていた。

「困ったわ……。このまま店を出て行くわけにもいかないし……」

お玉は、逡巡^{しゆんじゆん}した挙げ句、とりあえず四郎兵衛を探しに倉の方へ行ってみる事にした。

吉屋には八つの倉がある。

一番倉と二番倉は、かなり古い時代に建てられたもので、使わなくなった家財道具などが埃^{ほこ}を被つたまま押し込められていた。ここには大掃除のとき以外、滅多に店の者が立ち入る事はない。

一方、四番から八番までの倉は、堀割に面した場所に建てられた水油の倉庫で、船から下ろした積み荷を管理するため、常に当番の手代が何人が詰めていた。

お玉は、まずこの油倉庫から探してみることにした。

廻船が着くたび賑やかに人足や商人たちが出入りするこれらの倉では、早朝から多くの奉公人たちが忙しく立ち働いている。ひよつとして平次に逢えるのではと期待したお玉であったが、どの倉を探しても彼の姿は見当たらなかった。

仕方なく、四番倉の帳場にいた年配の手代に四郎兵衛の所在を訊

ねてみると、

「番頭さんなら、ちょうどいま私たちも探していたところさ。なんせあの人が、通い帳やら倉の鍵やらをみんな持ち歩いているから困ってるんだ……」

「ここには、まったく顔を見せていないのですか？」

「何せいそがしい人だからねえ……。すまないが、もし見かけたらここにも顔を出すよう伝えておくれ」

ここには、いないようね……。

次に彼女は、一番倉と二番倉へ向かった。

それは、屋敷裏手の雑木が生い茂った片隅にある。苔むした土蔵造りの倉には、常にしつかりと南京錠が下ろされていた。鉄格子の付いた小さな明かり取りの窓から中の様子を覗いてみたが、真つ暗な倉庫の中に人のいる気配はない。

ここも違う……。

残るは、三番倉だけである。

「……この三番倉は、何だかとても怪しいって松江さんが言ってたわ。おたきさんにも近付くなって念を押されたし……。どうしようかしら？」

一瞬、お玉の脳裏をお小夜の悲惨な死顔がかすめ、彼女はぶるつと身震いした。しかし厄介な事に、この可愛らしい娘の中には、確実に罔つ引き藤次の遺伝子が受け継がれていたのだ……。

濡れぬ先こそ露をも厭^{いと}え……。って、お父^{いと}つあんがよく言ってたわ……。意味は、良く分かんないけど……。

お玉は、晴天を突き上げる入道雲のいただきを仰いですうつと大きく息を吸い込んだ。

鳶の鳴くこえが耳に心地よい。

そうして今度は目を閉じたままゆっくりと息を吐き出した。

両の拳をぐつと握りしめる……。

行こう！ 行つて、あたしのこの目で確かめよう！

そう覚悟を決めると、彼女は、猫のように円らな瞳を油断なく光らせ、木陰に身を隠しながら一步、また一步と三番倉に近付いていた……。

吉屋の三番倉は、一種異様な雰囲気しゅくゐを漂わせている。

漆喰の壁は、全面が真っ黒く塗装され、窓の類は一切付いていない。かわりに通気用のダクトが等間隔に並び、屋根には一面太陽光発電のパネルが敷き詰められていた。

そして内部からは、絶えず何か得体の知れない動力音が低い唸り声となつて漏れだしていた。

あら、扉が開いているわ……？

いつもは嚴重に施錠されている三番倉の重たい扉が、ほんのわずかだけ開いていた。誰かが慌てて中に入り閉め忘れたようだ。

お玉は、物音をさせないよう慎重に近付くと、扉の隙間からそつと中を覗き込んだ。内部からひんやりと漏れ出すエアコンの冷氣がお玉の顔を撫でる。

彼女の視線の先、入り口からすぐの所に白衣を着た僧侶が二人、語気を荒げながら話し込んでいるのが見えた……。

セキユリティ・ボリス

「黒服の四人はともかく、用心棒をやられたのは痛かったな。あれを造るのにどれだけ苦労した事か……」

「我々が発見したときには、既に死亡していたのだ。だが、体細胞のサンプルは保存してあるから、母体さえ手に入ればいつでもクローンを造り出せる。そんな事より、逃げた連中の足取りがいつこうに掴めないようだ……」

「そろそろ、この施設も引き揚げた方が良さそうだな。今夜にでも阿闍梨様の脳を新しい生体へ移植して、早々に機材を他所へ移すと

しよう……」

「ふむ……。少し勿体ないが、ここは爆破して証拠を隠滅しなければなるまい」

爆破ですって、大変！ みんなに知らせなくちゃ……。

そう思って後ろを振り向いた途端、お玉の表情は凍り付いた。

いつの間にか薄ら笑いを浮かべた蓮華阿闍梨が立っていたのだ……。

次回へ……。

藤次と平次

十六、

「ようするにアレかい……？」

お神楽面のひよつとこのようにおちよぼ口を突き出して、藤次が猪口ちよこの酒をずずつと啜すすった。

「世の中は三日見ぬ間の桜かな……って言うアレの事かい？」
「違つて、何べん言やあ分かるんだ？」
「みらい」から来た苦勞人なんだよ、”いでん”の苦勞人」

「いでん？ 何だい、いでんってのは？ 聞いたこともねえな、おでんや田楽なら知ってるけどよ……」

「いでんだよ、い・で・ん！ 誰がおでんの話をしてるんだい、馬鹿にしゃーがつてこん畜生め」

永井兵庫は、心底うんざりしたような顔で湯呑みの酒をぐいっと空けた。

その横では佐吉親分が、不器用な手つきで豆腐を食いながら、うんうんと半分うわの空で適当に相槌を打っている。さらにその向かいでは、儀右衛門が逆さに立てた酒樽の底に肘を突き、手酌でもって結構な勢いでにやけた口に杯を運んでいた……。

「だけどよ、苦勞人なんて言うならアレだぜ……、俺だつて六つの時分にあ、もう材木町の太野屋に奉公に上がってたしよ……、でもあそこは、翌年にあ火事ですっかり焼けちまったんだ……、その後は、ほれ、本所にある四つ目屋、あそこに拾われてなあ……、ところが、あの店の主人ときたらとんだ因業親爺ですよ……」

「あんたの苦勞話はいいよ！ 今は、吉屋とどうケリをつけるかって話をしてるんじゃないかっ！」

「おいおい、喧嘩するんじゃないよ。ここは皆で協力して事を運ばないと……」

一向に話の噛み合わない藤次と兵庫を見かねて、伊助が助け船を出した。いま、深川八幡門前町にある縄暖簾なわのれんに集まった顔ぶれの中で唯一シラフなのは、この骨張った老人ただ一人であった。

「とにかくだ、吉屋の屋敷内で何かとんでもねえ悪事が行われてるってえのは間違いなさそうだ。ここはひとつ、御上のご威光をもつてだな……おい親分、聞いてるのかい!？」

「おつと済まねえな、どうもこの豆腐が食いづらくて……」

「何だい、お前いさんたちは、さつきから揃いも揃って真剣味のない!」

とうとう伊助が癪癢だんしゃくを起こしたので、みな苦笑しながら頭を掻いたが、それを見計らったように、早川虎之助が息せき切って店の中に駆け込んできた。

「おい、聞いてくれ! 何だか吉屋の様子がおかしいぞ。今日に限って槍を担いだ黒袈裟の坊主どもが十五、六人も離れ家の廻りをぐるーりと取り囲んでるしよ、かがり火なんか焚いて何だかえらく物々しい雰囲気なんだ。あいつら今夜あたり、また何かとんでもねえ事をやらかすんじゃないかねえのか?」

虎之助は、一人だけ貧乏くじを引いて、例の火の見やぐらのてっぺんから吉屋の見張番をやらされていたのだ。

彼は、儀右衛門が口へと運ぶ澄み酒の満たされた杯を見てごくりと喉を鳴らした。それに気付いた伊助が、相好を崩しながら手元に置いてあった徳利を突き出した。

「ご苦労だったね。まあ、一杯やりな」

「こいつあ、どうも……」

虎之助がかしこまって捧げる杯に酒をそそぎながら、伊助は、目だけを佐吉親分に向けて少し暗い表情で言った。

「なあ、親分よ……、俺たち町方が徒党を組んで吉屋に乗り込むわけにもいくめえ。この際、佐久間の旦那にもういっぺん出張ってもらう事は出来ねえのかい？」

「……………そうですね」

佐吉親分は、口まで持つていきかけた猪口を再び置くと、肩を落としてながらふつと酒臭いため息をついた。

「佐久間様は、吉屋に都合三度も乗り込んでおきながら三度ともしくじつて大恥をかいていなさる。よっぽど確かな証拠でもあがらねえかぎり、二度と吉屋には近寄りもしないでしょうね……。いま、渡辺様が一生懸命骨を折ってくだすってるんですが……………」

佐吉親分と気心の知れた南町の渡辺忠次郎は、じつは外廻りの同心ではない。例繰方といって、数寄屋橋門内にある御番所に詰め、事件の判例などを扱う内勤業務の役人であった。佐吉や藤次は、もともとこの忠次郎の父親である渡辺小右衛門が本所方下役だったころに使っていた岡つ引なのだが、彼が隠居し、忠次郎が添物書役としてその跡を継いだからは、佐久間和三郎という定町廻りの同心から十手を預かっていた。

しかし、佐久間は、どちらかという事なかれ主義の役人で、
「いけいけ」の佐吉たちとは今一つ馬が合わなかったのだ。

「吉屋で最初の”ほとけ”が出たのは八年前……、あれから勘定して、一体どれくれえの死人が出たと思ってやがるんだ……………」

「まあ、御上の役人なんてえのは、体裁ばかり気にするもんです。ややこしい事件に首を突っ込んで恥をかくよりは、知らんぷりしてほとぼりの冷めるのを待つのが利口と考えるんでしょうね……………」

「そうそう！ 仏ほつとけ、神かまうなーってね」

投げやりな佐吉親分のつぶやきに、すかさず藤次がちゃちゃを入れた。伊助は、小さく肩を竦めながら右手に持った徳利の中身を自分の湯呑みへそそぎ始めた。

「どれ、景気づけた……、今夜はひとつ、あたしも一杯いただこうかね」

そうしてその酒をちびりと舐めてから、伊助は「あれ？」と言った。

「今日は、どうも酒の減りが遅いと思ったら、松江太夫と鶴吉の姿が見えねえじゃねえか。酒にあ目のない二人が揃いも揃って、いたい何処にしつぱりとしけ込んでやがるんだあ？」

「太夫と鶴吉でしたら、日が傾く前からずうと吉屋に潜^{ひそ}んでおりやすが」

「ええっ、何だって！？　なに考えてるんだい、あいつらは？　無鉄砲にもほどがある！」

伊助は、目を怒らせながら湯呑みの酒を一息に喉に流し込むと、勇ましく立ち上がって骨張った顎をぐいとしやくった。

「そういう事なら、もうこんな所でぐずぐずしてる道理はねえ、すぐにでも吉屋に乗り込んでいつて坊主どもを締め上げ、すべてを洗いざらい白状させてやろうじゃねえか」

「待って下せえよ、伊助さん。こちらら仮にも御上から十手を預かる身だ。いくらなんでも、そんな強引な……」

「べらぼうめえ！　御上が恐くって鼻がかめるかってんだ」

そこに突然、大柄な男がのそつと現れ、そのまな板のような顔で暖簾をかき分けながら、ぬうつと店の中にたくましい肩を差し入れてきた。その男は、すぐに佐吉親分の姿を見留めると大股に近付いてきた。

「……親分さん、探しましたよ」

「あつ、手前え！　平次じゃねえかつ、この野郎、俺の大え事なお玉に……」

腕まくりして立ち上がるうとする藤次をぐいつと引き戻しておいて、佐吉親分が押し出しの良い四角い顔を平次の方に振り向けた。

「おう、お前えか……、神妙な顔して、どしたい？」

平次は、軽く会釈をしながら上目遣いに佐吉親分を見た。その精悍な顔つきは、藤次や佐吉が見知っているあのウドの大木のもではなかった……。

「ぜひとも親分たちのお力を拝借したく、こうしてまかり越しました。今から、あつしらの捕り物に協力してもらいてえ。どうぞ、すぐにお支度なすって下さい」

「何だとお？」

眉を八の字にして訝しがる佐吉であったが、その時、平次の後ろから現れた人物を見て「あつ！」と驚きの声を上げた。

「……あなたは、南町の小池様じゃあございませんか？」

町奉行所の役人には与力と同心がいる。

奉行直属の部下は与力であり、同心はさらにその配下を務める下級役人であった。しかし、俗に三廻りと呼ばれる定町廻り、臨時廻り、隠密廻りの役目には与力がなく、同心のみで構成されていた。よって、彼ら同心にとってはこの三廻りになることが最高の出世であった。中でも隠密廻りはその筆頭の地位にあり、言うなれば、町奉行所同心の頂点に立つ者であったのだ。

小池藤太郎とつたろうは、南町奉行池田播磨守はりまのかみの下で六年間も隠密廻りを勤めている凄腕の同心である。

通常、同心が直接奉行にまみえることはないが、彼ら隠密廻り同心に限っては、奉行から直々に特命を受けて極秘に凶悪事件の捜査をしているのである。

「久しぶりだな、佐吉」

「へい、左様でございやすね、渡辺様のお父上が隠居なすって以来でしようか……」

「ははは……、その渡辺の倅せがれに聞いたんだが、おめえ達、近頃吉屋にべったり張り付いてるそうじゃねえか」

「……へい」

小池は、佐吉が場所を譲った酒樽の上に腰掛けると平次の方に軽い一瞥をくれた。

「じつあ、俺も吉屋には前々から目を付けていてな、そこにいる平次を送り込んで探りを入れてたんだが、吉屋のやつも大した狸でよ、なかなかシッポを出しやがらねえもんだから往生してたんだ……」

藤次は、目を剥いて金魚のように口をぱくぱくさせていたが、ようやく上ずった声を絞り出した。

「お、おい……するつてえと、平次、お前え………もしかして、俺達の同業者だったのか……？」

平次は、懷から真鍮製の房なし十手を取り出すと、手のひらにぼんぼんと当てて見せながら爽やかに笑った。

「親分たちが吉屋の中を引っかき回してくれたおかげで、ようやく悪事の証拠を掴めました。やつら、御禁制の阿片を大量に隠し持ってたんです」

小池藤太郎は、平次に向かって満足げに頷いてみせてから、佐吉親分の方に向き直り、その苦み走った顔を引き締めて目だけで笑いかけた

「ま、そういう事だ。佐久間とは話がついてる。捕り物はおめえ達の十八番だ、せいぜい気張ってもらうぜ」

驚きのあまり固まっている佐吉親分の肩を、伊助がポンと叩いた。「良かったなあ、親分。これで正々堂々、吉屋に乗り込めるじゃねえか」

「あ……ああ、そうだな……。捨てる神あれば拾う神ありつてえのはまさにこの事だ。ははは……、なあ、藤次よ？」

「へ、へい……」

未だ茫然としている藤次に向かつて、平次が凜々しく言い放った。
「おやっさん、ひとつ、あつしと手柄の比べっこをしようじゃありませんか」

その言葉を聞いた途端、藤次の顔がみるみる朱に染まった。

「しゃ、しゃらくせえやい！ まだ、お前えに”おやっさん”呼ばわりされる謂^{いわ}れはねえぞ。ようし勝負だ、もしお前えが負けたらお玉の事あ、金輪際すっぱりと諦めてもらうぜ」

そう息巻く藤次を、永井兵庫がにやけた顔でからかった。

「じゃあ、あんたが負けたときは、どうすんだ？」

藤次は、えへんと胸を張った。

「そんなときあ、お玉を手前えにくれてやる！」

「あ、ありがとうございやす、おやっさん……」

そこに、おたきが慌てて飛び込んできた。

「ああ、本当だ、ここにいたんだ。ちよつと平次さん、あんた大変だよ！ お玉ちゃんがなくなっちゃったんだ。こんなところで油売ってる場合じゃないんだよ」

次回へ……。

藤次と平次（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

縄暖簾とは、いわゆる一杯飲み屋の事です。現代の居酒屋みたいにテーブルとイスがあるわけではなく、立ち飲みか、あるいは床几や酒樽に腰掛け、煮しめや豆腐田楽といったものを肴に1杯か2杯ひっかけて帰る程度のもだったようです。文化・文政の頃で酒1合が2〜30文だったといいますから、酒2、3合と肴2、3品で100文程度だったのでしょう。ちなみに100文あれば銭湯に10回通えるし、相場にもよりますが米が1升買えました。

はんぞき

十七、

おうやま	こやま	ぴっかりどんの	はなつぼ
わにくち	おとどの	のどどの	かたどの
ひじどの	てのくび	てのさら	
じんきち	じころび	せいなが	きつちようどの
と……			ことこ

あら……？ この唄、あたし知ってるわ。……えーと……えーと、確か、あたしがまだ七つくらい頃……、斜向^{はすむ}かいに住んでいた幸兵衛のおじちゃんがよく歌って聞かせてくれた唄だわ……。八丈島を御赦免になった畳職人の幸兵衛さんが……。なあ、お玉ちゃん、平次とは仲良くしてやってくれて……。平次は、島帰りの罪人の息子だけれど、俺と違って心の真っ直ぐな奴だからって……。平次さん……。

へいじ……さん……？

あれ……？

お玉は、かっつと双眸を見開いた。

きやあ、まぶしい！

気怠い睡余に霧^{きりふた}り塞がった網膜を鋭く突き刺すハロゲン光に彼女の視神経がパニックを起こし、瞳孔がずっと窄まった。そして、盛夏の陽ざしのように部屋中を満たす豊かな光量を手で遮ろうとしてお玉はぎよっとなった。

何よ、これっ！？

彼女の体は、全裸のまま診察台に縛り付けられていたのだ。

必死に何か叫ぼうとしたが上手く回れず、何度やっても甘ったるい呻き声のようになってしまう。手足の先は痺れて感覚がなく、まるで土塊か何かを詰められているように頭が重かった。

あたし、……きつと薬を飲まされているんだわ。

お玉は、訳が分からず必死の思いで首を巡らせた。誰かいる……。何だか生臭いような臭いがする……。彼女の側には、金糸の袈裟をまとった蓮華阿闍梨が冷酷な笑みをたたえたまま、じっとこちらを見下ろしていたのだ……。

阿闍梨は、前置きもせず唐突に語り始めた。

「お前はハンザキという生き物を見た事があるか？」

この人は、いったい何を言っているの？ 冗談じゃないわ……。

お玉の視線は、不安にさいなまれてふらふらと宙をさまよった。部屋の中には、彼女が見た事もないような機械や、薄緑色の液体を満たした円柱状のガラスケースが所狭しと並んでいた。どのケースにも、不気味な物体が淡い気泡に包まれながらぶかぶかと漂っている。

その一つに、稚児ほどの大きさもあるずんぐりとした蜥蜴とかげみたいな生物が、火山岩のような皮膚をガラスケースに押し付けながら浮遊しているのが見えた……。

「半分に切り刻んでも生きているから”半裂き”というのだ。またの名をオオサンショウウオともいう……」

阿闍梨は、ガラス越しにそのオオサンショウウオを眺めながら、くつくつと笑いを噛み殺した。

「人間は、一度指を切断してしまったら、もう二度と新しい指が生えてくることはない……。しかしこいつらは、手足を何度切り離してもすぐにまた新しいものが生えてくるのだ……。この驚異的な再

生能力の秘密はどこにあると思う？ えっ？ くつくつく……、そうだな、お前などに訊いても答えられるはずがないな……」

蓮華阿闍梨は、ガラスケースの表面を曇らせている結露の水滴を指で拭いながら、中にいるオオサンショウウオを愛おしげに見つめた。

「この生命力の根源はな、こいつが体内に保有する多能性幹細胞というものにあるのだ」

彼は、お玉に理解できるはずもない話を嬉々として語り続ける。

お玉は、それを聞き流し、救いを求めて部屋中を見回した。

そして……、それを見つけてしまった。

えっ！？ あ、あれは、まさか……。

彼女は、悲鳴を上げた。……ように感じたが、実際には、ただ口をがくがくと上下させて赤児のような呻きを漏らしただけであった。しかし、その視線は吸い付けられるようにある一点を凝視したまま動かさなくなっていた。

その、ひときわ大きな生体培養ケースには、昨日まで蓮華阿闍梨の新しい生体が入れられていた。今は、まったく別の人体が赤褐色の保存液に浸されたまま生氣なく漂っている。

旦那様！？

それは、吉屋喜兵衛の変わり果てた姿だった。

彼は、全裸のまま手足を切断され、鬚の解かれたざんばら髪を海藻のように漂わせながら白目を剥いていた。恐怖におののくお玉の視線に気付くと、蓮華阿闍梨は、満足げな笑みに大袈裟なゼスチャを加えてなおも語り続けた。

「我々は、オオサンショウウオの体液から採取した血清を使うことで、人間にそれと同等の再生能力を植え付ける事に成功したのだよ。その記念すべき被検体第一号が、この吉屋喜兵衛だ……」

よく見ると彼の切断された手足の切り口から、桃色の肉塊が突き出ているのが分かる。それは、まだ生え始めの段階だが、五指を持つれっきとした手足に違いなかった。

「はっはっは！ 彼は、不幸にして拒絶反応に耐えられず標本と成り果てたが、今一度改良を加えた血清がここにある。後でお前の体に試してやるから楽しみに待っておれ。みごと、再生能力を身に付けたあかつきには、この俺の細胞から取り出したクローン胚をお前の卵子に受精させて究極のボディを生産するでしょう」

蓮華阿闍梨が目で合図すると、白衣を着た僧がすかさず睡眠薬の注射器をお玉の体に突き立てた。彼女の細い体が徐々にその力を失い、重力に抗しきれずに手足をだらしなく投げ出した。

遠ざかる意識の中で、お玉の脳裏にまたあの唄が聞こえてきた：

…。

頭 <small>あたま</small>	額 <small>こめ</small>	両目の	鼻壺
鰐口 <small>おいら</small>	顎 <small>あご</small>	喉どの	肩どの
肘どの	手の首	手の平	
親指 <small>おやぢ</small>	人差し指 <small>ひとさし</small>	中指 <small>せいな</small>	薬指 <small>きつち</small>
			小指 <small>こさ</small> ……

そうそう、思い出したわ。平次さんが言ったのよ。この唄は、お仕置きされた罪人の散らばった死体を集めるときに歌う、恐ーい恐ーい唄なんだって……。ふふふっ、平次さんったら、あたしを怖がらせようたって、そうはいかないんだから。

ねっ、平次さん……………。

平次さ……………ん。

やがて蓮華阿闍梨は、透明色のビニルテントで作られた無菌室に

入った。中には手術台が二つ並べられ、一方にはすでに彼の新しいボディが寝かされていた。そのみずみずしい肉体には阿闍梨がとうの昔に失ったはずの雄々しい男性器が付いていた。

「くつくく……、いよいよ、この奇形腫テラトーマに侵された継ぎはぎだらけの体ともおさらばだ。新しい体に移ったら、ひとつ八百年ぶりに女でも犯してやろうか。はーはははっ！」

黄色くむくんだ顔に狂気じみた笑みを湛え、やがて彼もゆっくりと手術台の上に横たわった……。

次回へ……。

はんざき（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

八丈島古謡『大山小山』は、小さな子供をあやすときに歌います。右手で歌詞と対応する体の各部分を指しながら歌い、子供の注意を引きつけるのです。伊豆諸島にある八丈島は古くから流刑地だったため、日本各地の様々な伝統文化のるつぼでした。なかでも島独自の伝統音楽はとてもユニークで、この島のアイデンティティの中心的存在となっています。多くの古謡が残されていますが、「シヨメリ、シヨメ」という合いの手がとても印象的です。

メタモルフォーゼ

十八、

「……充電完了しました」

「よし、カウンターショックの出力を200ジュールから300ジュールに上げる」

「はい」

白衣の僧が、電気除細動装置の操作パネル上にある出力つまみを右へ大きく回すと、手術台を取り囲んでいる僧たちの間に緊張がはした。心電図は、相変わらず凧いだ海原のようにフラットだ。

「通電しろ」

「3……2……1……通電！」

次の瞬間、電気ショックの衝撃で手術台に横たわる蓮華阿闍梨の体がばんと跳ね上がり、彼の胸部に除細動パドルを押し当てていた僧が反動でよろめいた。その振動で、輸血用チューブと人工呼吸のエアウェイが大きくたわみ、手術台のスプリングが軋んで鈍い悲鳴を上げた。

「……どうだ？」

「ダメです」

心電図の波形をモニタリングしていた僧たちが、白いマスクの下から狼狽えた声を絞り出した。彼らは、額に大量の汗を浮かべ、一様に焦りの色を見せている。

無事に新しい生体への脳移植を終えた蓮華阿闍梨であつたが、最終段階の心肺蘇生が上手くいかず、このままでは脳細胞が死滅する恐れがあつたのだ。

「よ、よし、もう一度充電しろ……、今度は、出力を最高の360

ジュールまで上げる」

「だ、大丈夫でしょうか……？」

「躊躇ちゆうちゆうしている暇はない、一か八かだ」

蓮華阿闍梨の新しい肉体は、入滅した釈尊のように穏やかな表情で仰臥している。その肋骨が浮き上がった胸部に、除細動パドルの電極パッドを押し当てながら白衣の僧が低く呻くように言った。

「次でダメならこの体はあきらめて、………いつそ阿闍梨様のクローンを造ってみては？」

「ばかな！ クローンは人格まで継承しない。そんなものは、阿闍梨様であって阿闍梨様ではないのだ……」

やがて、除細動装置を操作する僧の緊張しきった声が充電完了を告げた。

「よし、通電しろ」

「通電しますっ！」

バシッという音がして蓮華阿闍梨の体が激しく上下し、それと同時に鼻をつくオゾンの臭いが辺りに立ちこめた。

一瞬の静寂が訪れる………。

「………ダ、ダメです。心室筋の収縮が連続しません！」

だらしなく四肢を投げ出した阿闍梨の姿は、まるで糸の切れた劇人形のようにあり、その体には元から命など宿っていないかのようにであった……。

「まずいぞ……、どうする？」

「………取りあえず血液が凝固しないよう融血剤を投与しろ。それと、リドカイン、アトロピン、およびエピネフリンをそれぞれ10cc静注するんだ。阿闍梨様を……いや、蓮見教授を絶対に死なせてはならない」

そう呻いてぎりつと歯噛みした白衣の僧は、次に無菌室の外にいる僧を大声で呼びつけた。

「おい、緊急事態だ！ 阿闍梨様の新しい体が蘇生しない。大至急この対処法を医療用アンドロイドに問いただしてくれ」

「は、はいっ」

指示を受けた僧は、すぐに部屋の隅に置かれた黄金の髑髏のもとへ駆け寄り、その道化じみた顔に向かって厳しく問いつめた。

「おいっ！ CPRが上手くないぞ、どうすればいい？」

しばしの間を置いて、その髑髏は、抑揚のない機械じみた声で答えた。

「ア……、アイデー、ト、パッスワードヲ、ニユウロク、シテクダセエ……」

「……あん？ パスワードは、さっき言ったぞ」

僧は、訝しげに髑髏を見つめた。

吉屋喜兵衛や番頭の四郎兵衛が本尊と崇めたこの髑髏の正体は、未来文明の粋を集めて造られた医療用アンドロイドの頭部であった。それは、人間の脳に限りなく近い有機素子で出来た集積回路を頭脳に持つスーパーコンピュータであったのだ。

一瞬このアンドロイドに疑いの眼差しを向けた僧は、やがて別の僧を呼んで問いかけた。

「おい、こいつの調子が変わだ。とうとうROMがいかれたか……？」

「うーん……、我々が時間移動中に遭難してから数百年間、ずうつと土の中に埋もれていたからなあ……。八年前に偶然掘り出されたときだって、こいつがちゃんと動くとは誰も思ってもみななかったんだ」

「でも、こいつのお陰でヒトクローンES細胞を造り出すことに成功したんだぞ。阿闍梨様の新しい生体だって……」

「とにかく今は緊急事態だ、だましだまし使っていくしかないだろう」

そして彼らは、髑髏に向かってもう一度問いかけてみた。

「医療用アンドロイドD4-QP、教えてくれ。阿闍梨様を蘇生させるにはどうしたらいい？」

「ア、ア、アイデート……痛テツ！」

髑髏が安置されている大型機械の裏側には、松江太夫が息を殺しながら身を潜めていた。彼女は、となりにしゃがんで髑髏の声色を真似ている松川鶴吉の耳を勢いよく引つ張った。

（おいこら！ もっと、それらしいセリフを並べやがれ）

松江太夫が目でそう叱りつけると、鶴吉は、冷房の効いた室内にもかかわらず、こめかみにつつつと冷や汗を滴らせた。

（そ、そんなこと言っただってよう……、俺あ、頭はそこそ良いが、学はからつき無えんだ）

鶴吉と太夫は、蓮華阿闍梨の手下どもが宵闇に紛れてこの三番倉に髑髏を運び入れたとき、隙をついて一緒に忍び込んだのであった。髑髏は、からくり儀右衛門の手によってあらかじめ音声出力端子が外されていた……。

（弱っちまったなあ……、いつそ香具師やしの口上なら上手く言えるんだが）

鶴吉は、何かそれっぽい言葉がないか懸命に頭をめぐらせた末、今さっき聞いたうる覚えの言葉を口にしてみた。

「オ、オーサンショウオノ……、ケ、ケ、ケッセーヲ……、ニユウロク、シテクダセエ……」

「何……？ D4-QP、もう一度言ってくれ」

「オーサンショウオノ……ケッセー」

僧たちは、互いの顔を見合わせた。

「……どういうことだ？ 大山椒魚の体液から造った血清を、今こ

ここで阿闍梨様に打てというのか……？」

「しかし、あれはまだ試験段階だぞ、生体内イン・ビボの実験にも成功していないし……」

「でも、今までD4・QPの言う通りにやって失敗した事はないんだ。何せ、我々の生きていた時代の医療データを余すことなくインプットしてあるからな……」

そのとき、無菌室から「おうい、まだか？」という切迫した叫び声がした。二人の僧は、互いの顔を見合わせながら意を決したようにうなずいた。

「よし、D4・QPこいつに賭けてみよう！」

二人の僧がいなくなると、鶴吉は、さつそく松江太夫によって、さつきとは反対側の耳を引っ張られながら厳しく責め立てられた。

「この、おたんこなす！ すつとこどつこい！ なに訳の分かんないことばかり言ってるんだよ」

「だ、だってよう太夫……、あいつら、伴天連ばてれんみてえな言葉ばかり喋りやがるし……」

「奴らを、この髑髏を使ってだまぐらかし、一網打尽にしようつてえ魂胆なんだ、あんたが上手くやってくれなきゃ困るじゃないか」

「……なあ太夫、涙を吞んで、ここはひとまず引き揚げましょうや、明晩にでもまた再起をはかるとしてさ……」

「ばかつ！ 何が涙を吞んでだいこの俵録玉ひょうろくたまつ！ お玉ちゃんをこんな所に残して引き揚げられる訳ないだろ！」

鶴吉は、情けない顔をしてうへいと首をすくめた。

一方、ビニルテントの無菌室では、心電図のモニタを食い入るように見つめていた僧たちの間から歓喜の声が上がっていた。

「やった！ 阿闍梨様の心臓が動き出したぞ」

「やはり医療用アンドロイドの言うことは正しかったんだ」

例の血清を静脈に注射した途端、鞭がしなるように心電図の波形

が動き出し、土気色だった蓮華阿闍梨の顔に徐々に赤みがさしていった。やがて彼は、ゆっくりと瞼を持ち上げ充血した目を数回瞬いた……。

「あ、阿闍梨様、お目覚めになったのですね……。ああ、良かった、一時はどうなる事かと……」

「新しい体を得られたご気分はいかがですか？　いま人工呼吸器の挿管を外します」

口々に喜びの言葉を投げかける弟子たちの顔をぐるーりと見回した後、蓮華阿闍梨はおもむろに上体を起こした。

「い、いけませんよ阿闍梨様、もうしばらく安静にしていなければ」
その言葉を見捨て、蓮華阿闍梨は、憑かれたように己の体中をまさぐった……。

「は……ははは……これが、これが俺か？　俺の体なのかっ！？
ふふふ……素晴らしい！　実に素晴らしいぞ！　ははははーっ！」

やがて彼は、輸血用チューブを乱暴に引き抜くと手術台の横に立ち上がり、自分の股間を覗き込んで狂喜した。

「性器だ……わたしの性器がここにあるぞ……ひ……ひひ……ひひひひひ……」

「あ、阿闍梨様……、いま点滴の準備をしますので、もう一度横になってください」

戸惑いながら語りかける白衣の僧の襟首を締め上げ、蓮華阿闍梨は、口の端から涎の糸を引きながら喚いた。

「女だ……女だ、女だ、女だーっ！　女を連れてこい、今すぐ女をここに連れてくるのだ。ひーひっひっひ！　私の……私の性器が、私の遺伝子が女の体を求めている……」

「だ、だ、駄目ですよ阿闍梨様、今はまず体力を回復しなくては……」

必死に阿闍梨をなだめようとする弟子の僧を乱暴に払いのけると、

彼は爬虫類じみた目をぎらつかせて呟いた。

「……………そういえば腹減ったな」

次の瞬間、そこにいる全員の表情が凍り付いた。

蓮華阿闍梨の口から鞭のように伸びた赤い舌が天井を這う一匹の蜘蛛を捕らえ、たちまち己の口に引きずり込むとそのまま飲み込んだのである。

彼の左右の目は、完全に別々の方向を見ていた……。

「……………あ、あ、あ、阿闍梨様」

恐れおののく弟子の僧たちを前に、表情一つ変えず口の中にある蜘蛛をくちやくちやくと咀嚼そしゃくしていた蓮華阿闍梨は、やがてそれをごくんと飲み下すと感情のない虚ろな視線をぐるりと巡らせた。

「ふしゅるるる……………、食い足りねええぞ。もつと、もつと、もつと食てえええぞ」

「ひいつ！」

阿闍梨の顔を覗き込んだ僧が、その場にへたりこんで失禁した。

理知的だった蓮華阿闍梨の風貌は、今や純然たる生存本能に支配された下等生物のものと成り果てていたのだ……。

「たーんぱーく質がああ、欲っしいiiiiいぞおおおお」

間の抜けた声でそう叫んだ途端、阿闍梨の背骨がめりめりと音を立てて変形こぶし始めた。

巨大な瘤こぶを背負い込むように膨れあがった背面から剛毛に覆われた赤黒い腕が何本も突き出し、その鋭い鉤爪で周囲にいた僧の体をつちりと掴んだ。やがて捕らえた獲物をその怪力で口元まで引きずると、まるでリングゴでも囓るようにはりばりと音を立てて喰い始めた。

「ひiiiiiiiiいっ！ 止め止め止め止めてえええええっ！」

「たたた、大変だーっ！ 阿闍梨様の体が、キメラ化したぞーっ！」

阿修羅のごとく何本もの腕を生やし、かつての部下達を生理的欲求の赴くままに捕食する化け物となった蓮華阿闍梨の浅ましい姿を見て、他の者たちは転げるようにしてその場から逃げ出した。

そんな様子をしり目に、蓮華阿闍梨の四つある邪眼の一つは、部屋の隅に全裸で横たわるお玉の姿をしっかりと捉えていたのであった……。

次回へ……。

メタモルフォーゼ（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

人の受精卵が卵割をはじめ、やがて胚盤胞となると、その中に内部細胞塊というものが出来ます。この内部細胞塊を構成するのは多能性幹細胞といって、人体のどんな部分にでも変化しうるマルチ細胞なのです。この多能性幹細胞を利用して、人体の負傷部分や疾患部分を新しく作り直してしまおうというのが再生医学の元となった考え方です。そう遠くない将来、自分自身の体から採取した細胞を培養してつくった器官や組織を、癌などに侵された部分と交換してしまうなんてことが可能になるかもしれませんね。

地獄は壁一重

十九、

本所横川町にある時の鐘が暮れ六つをつけると、木場のあたりにたむろする野良犬どもがいつせいに遠吠えを始めた。

つけ木売りの少年が、売れ残った木片を重そうに天秤棒でかつぎながら足早に家路をたどる。

すでに屋根瓦を睨みつけるような下弦の月が空の高いところにあつて、その繊細なすがたを大川にゆらゆらと游がせていた。

永代橋のたもと、吉屋のある佐賀町の周辺がにわかに騒然となつた。

宵闇の朧な景觀に『御用』と書かれた提灯が二、三十ほども浮かび上がると、吉屋の周りを十重二十重に取り囲みはじめたのだ。

打裂羽織に陣笠という捕物出役の町方与力が、ぶら提灯をさげた小者二人を左右に従えて吉屋の前に立つと、朱房のついた銀流しの十手を額の前にかざして声を張り上げた。

「南町奉行所である！ あるじの吉屋喜兵衛はおるかあ！？ 神妙に……」

彼が口上を言い終わらぬうちに、吉屋の表を立て切っていた大戸を蹴倒して奉公人たちが悲鳴を上げながら、わらわらと飛び出してきた。

「お役人さまーっ！ おた、おた、お助け……お助け下さいましー！」

「な、何事じゃ！？」

自分の野袴にすがりつかんばかりに駆け寄ってくる吉屋の奉公人たちに気圧され、与力は、後じさりながら狼狽えた声で訊ねた。

「こ、これ、その方ども、如何いたしたのじゃ？ 少し落ち着いて話さぬか」

「ば、ば、化け物が……倉の中に化け物が……」

「化け物だと？ ふん、なにをバカな事を」

「ほ、本当でございます、化け物が人を襲って……喰っているの
でございますっ！」

そう震える声でうつたえかける若い手代の横では、年配の女が取り乱した様子で泣き叫んでいた。

「だ、旦那様が……、昨夜から旦那様のすがたが見当たらないの
でございますう。うう……きつとあの化け物に喰われてしまったん
だわ！」

吉屋喜兵衛の妻女であるう贅沢な茶がすりの着物を着たその女は、
地面に突っ伏したまま、わーっと泣き崩れてしまった。

「うぬぬ……」

明日は非番だから今夜は久しぶりに小石川に囲っている妾のこ
ろへでも行つて……ぬふふふ、と表情をゆるめていた矢先、突然奉
行に呼び出され、この不本意な夜討ちの指揮をとるよう仰せつかつ
てしまったこの町方与力は、思わぬ成り行きに面食らつてひたすら
脂汗をにじませていた。

「おうい、お玉あ！ お玉はどこだ！？ おいつ、てめえ！ お玉
を見なかったか？」

藤次が、大声で叫びながら奉公人たちの間を訊ね回つたが、みな
蒼白な顔を横に振るばかりでさっぱり要領を得なかった。

「……きつと、まだ中にいるんだよ」

おたきが、険しい眼差しで店の奥の暗がりを見つめた……。

突然、倉の方から「ぎゃーっ！」という切羽詰まった悲鳴が上がった。

与力は、ぎくつと腰を引きながらあごを突き出し、目を皿のようにして開け放たれた障子戸の奥を凝視したままごくりと固唾を飲み込んだ……。

一向に動く気配を見せない与力にしびれを切らした隠密廻り同心、小池藤太郎が、佐吉親分と平次に目配せをしながら言った。

「俺たちだけで見に行こう……」

三人は、与力の返答を待たずに吉屋の正面から広い土間に上がり込み、慎重に身構えながら店の奥へと歩みを進めていった。その後藤次、永井兵庫、早川虎之助の三人が続く……。

めらめらと闇を舐める篝火に照らされた三番倉の周辺は、人っ子一人見当たらず茫漠としていた。ただ、鼻をつくような血の臭いだけが風のない淀んだ空気に充ちているのだ……。

「倉の中に明かりが灯ってますね……」

佐吉親分が押し殺した声で言う。わずかに開いている三番倉の扉から煌々と白い明かりがもれ出していた。

「お玉……」

藤次と平次は、お互い目でうなずきあった。

「いくぜ」

「へい」

二人並んで十手をかざしながら、一步、また一步と三番倉へと近付いて行く……、その時。

「うわあーっ！」

突然、倉の扉が勢いよく押し開けられると、半狂乱になった黒袈裟の僧侶が転がり出てきた。彼は、腰が抜けているらしく虫のように這ったまま手足をばたつかせていたが、その怯えきった視線が藤

次たちの姿を捉えると、驚きと安堵のあまり目を見開き、虚空を引っ掻きまわすように手を伸ばしながら必死に追いつてきた。

「たっ、たっ、たっ、助けてくれ、助けて、助けて……ひいーっ！」

しかし、すぐに彼の体は、意志とは裏腹に何かに引きずられるように再び扉の内へと引き戻されていったのだ。

「助けてくれっ、助けて……くっ、喰われる、喰われる、喰われ……」

藤次たちが茫然と見守る前で、その僧侶の姿が三番倉の中へと消えていった。

刹那、

「ぐぎぎぎ……ぎっ……ぎっ、ぎゃあーっ！」

断末魔の悲鳴は、すぐに掻き消えた。吉屋の奉公人たちの言う事が正しければ、化け物に喰われたのであろう……。

「お、おい……親分」

「まあ、待ちなっ……」

刀の柄に手を掛ける永井兵庫をいさめておいて、佐吉親分は、四角い顔に苦渋の表情を浮かべながら小池藤太郎の方を向き直った。

「小池様、こりゃあどうも一筋縄じゃいきそうもありやせんぜ」

「そうだな……。まずは捕り方の人数を増やし、あの倉を厳重に包囲させよう。どうやって化け物退治をするかは、それからだ……」

「……へい」

「俺あ、ひとつ走り御番所へ行ってくるよ。親分たちは、それまで倉の様子を見張っててくんな」

「あ、でも小池様……」

佐吉親分が止める間もなく、小池藤太郎は踵を返しもと来た方へと引き返していった。

「やれやれ……」

「親分、あつしがちよっくら行つて倉の中を見てきやしよう。なあ

に、化け物なんぞ怖がつてるようじゃ、とてもじゃねえが香具師なんかつとまりやせんぜ」

そう、言い終わるか終わらぬうちに、早川虎之助が風のような疾さで倉の方へと駆けていった。さすがは軽業師というべきか、足音を全く立てていない。金縛りにあったように十手を突き出したまま動けないでいる藤次と平次を追い越して、あつと言う間に三番倉の戸口に立った……。

へっ、化け物なんてえもんが本当にいてたまるかってんだ！
どうせ、願人坊主がカツポレでも踊ってるんだろ。ひとを騙くらかそうつたって、その手は桑名の焼はまぐりーってな。

みなが固唾を呑んで見守るなか、虎之助が半開きの扉からそつと中の様子をうかがった……。

「ひっ！」

倉の内部を一目見た瞬間、彼は、ぺたんと尻餅を突いて、そのままの格好で器用に手足をじたばた動かしながら、もの凄い速さで後退つて来た。

「ひいーっ！」

「おいおい、どうした？ 一体え中はどうなつてんだ？」

「お、お、親分、悪いこと言わねえ、見ない方がいいぜ。見たらきつと今晚うなされる……」

「なに馬鹿なことを言つてやがんだ」

今度は、佐吉親分が肩で風を切つてずんずん倉の入り口へと近づいていった。藤次と平次、それに永井兵庫がおっかなびっくり後に続く……。

佐吉は、扉の前でいったん立ち止まり、大きく深呼吸してから振り向いて藤次たちに目配せした。
いくぜ。

三人が無言でうなづく……。

親分は、意を決して勢いよく櫓の扉を開け放った。

「御用の筋だ！ 神妙に………」

「うわあっ！」

「こ、こりゃあ一体……」

………そこに広がっていたのは、まさに地獄絵図だった。

眩いばかりのハロゲン光に照らし出されたエポキシ樹脂の真っ白い床と、それを覆い尽くす生々しい赤や黒……それは、凝固しかかった大量の血溜まり……、強引に引きちぎられた手足……、髪の毛が生えたままの肉片……、はらわた腸を引きずった下半身……、まさに阿鼻叫喚の光景であつた……。

「………おい、藤次………ここは地獄の一丁目かい？」

「さあ……？ でも、ひよっとすると地獄の方がまだましなんじゃ………」

四人は、扉の内に茫然と立ち尽くし、眼前にひろがる惨劇を、まるで非現実的なもののように見つめていた。

「俺あ、お役目がらたいがい修羅場は見てきたつもりだ……。大火……押し込み……無理心中……。だが、こんなに惨え景色は初めて目にしたぜ………」

「あつしもですよ………」

三番倉の中は、空調設備がイカれたらしく、息が出来ないほど血の臭いに充ちていた。そして、そのただ中にひととき醜悪な存在感を放って……化け物がいた！

それは、牛ほどの大きさもあるつか……。

ガマガエルのような赤褐色の皮膚には黒い雲状紋が広がり、醜い胴体から生えた八本の足が、たらふく人肉を詰め込んでばんぱんに膨れあがった大きな腹の重量を支えていた……。

「ふしゆるうつうつ……、喰うい足りねえぞおおお」

その浅ましい怪物の造型で唯一人間の面影を残している頭部が、妙に抑揚のある間の抜けた声で言った。その顔は、まぎれもなく蓮華阿闍梨のものであったが、その表情からは知性というものがまるで感じられず、左右に二つずつ合計四個ある複眼は、それぞれ別の方向に感情のない視線を送っていた……。

「なな、何だありゃあ？ 一体、何の冗談だ……？」

「おそらく、ガマの化け物か……、土蜘蛛か……、まあ、狐狸のたぐいじゃねえ事だけは確かですね……」

「へっ……へへ……馬鹿言っちゃあいけねえや……嘘をつきじの御門跡ってね……、ありゃあ、きつと中に人が入ってんだよ」

阿闍梨の化け物は、平次たちには見向きもせず、さかんにその耳まで裂けた口からカメレオンのような長い舌を伸ばしては、何度も何度も、天井の片隅にひらひらと舞う獲物を捕らえようと試みていた。

「喰ういてえええ……、こいつ……、喰ういてえええ」

その獲物とは、一匹の白い蝶であった……。

「おや？ あれは、もしかすると松江太夫の手妻じゃねえか……？」
永井兵庫が蝶の正体に気付いて言った。

「そうだよ、あれは紙の蝶を太夫が飛ばしてるんだ、間違えねえ……」

……

「……てえことは、あの下に松江太夫たちが隠れているのか？」

「おそらく……」

そのとき、横倒しになった大型機械の陰から、男が一人、大声をあげながら飛び出してきた。

「な、永井のだんなーっ！ 佐吉親分ーっ！ おた、おた、お助けーっ！」

「誰だ、あいつあ？」

「ありゃあ、鶴吉じゃねえか！」

床に散らばった死体に蹴つまずきながら必死の形相で駆け戻って来るのは、もの真似師の松川鶴吉であった。

「ひーっ、地獄に仏とはまさにこの事……」

そう言つて駆け寄ってくる鶴吉の背中に、松江太夫が怒号を浴びせた。

「こ、こら、鶴吉！ この、馬鹿野郎！ あたしがこいつの気を逸らしているあいだに、お玉ちゃんを助けると言つただろうが！」

「何だとう！？」

藤次が鶴吉を掴まえ、その襟首をぐいぐい締め上げた。

「やい、鶴吉！ お玉がここにいいのか？」

「……い、いる、いるよ、いるからその手を放して……く、苦しい」

藤次が手を放すと、今度は平次がそれを引つたくるようにして、

鶴吉の襟首に掴みかかった。

「つ、鶴吉さん！ お玉ちゃんは？ お玉ちゃんはどこにいるんです？」

「ぐえ……」

つぶれたヒキガエルみたいな声を出して、鶴吉が部屋の一角を指差した。そこには折り畳み式の診察台があり……、その上には、全裸のお玉が力なく横たわっていたのだ……。

「お玉っ！」

「お玉ちゃん！」

次回へ……。

地獄は壁一重（後書き）

「閉伊琢司からのコメント」

捕物出役の町方与力の装束には諸説あります。『江戸町奉行所事蹟問答』では、野袴に火事羽織となっていますが、三田村鳶魚の説では、着流し襷に尻端折りとなっています。ちなみに、名和弓雄著の『間違いだらけの時代劇』には、与力が火事羽織で出張することはないと書かれていて、時代考証の難しさを痛感します。十手ひとつにしても、役目や地位で形状が異なり、また捕り物で使う縄も季節などによって色が違ったそうです。

弓曳童子

二十、

「それっ、お玉を救い出せ！」

「お玉ちゃん、いま助けてやるからな」

キメラ化して化け物と成り果てた蓮華阿闍梨が、松江太夫の飛ばす紙の蝶に気を取られているあいだに、診察台の上に意識なく横たわるお玉を救い出すべく、藤次、平次、佐吉親分、永井兵庫の四人が猛然と三番倉の中へ飛び込んだ。

エポキシ樹脂の床には化け物が食い散らかした残骸や、破損したバイオリアクターからこぼれ出た臓器などが散乱し、大量の血や培養液などが汚泥のごとくぶちまけられていた。

藤次たちは、血で滑っては転び、目玉を踏んづけては転び、腸に足を引っかけては転びしながら、漸うお玉の元へとたどり着いた。

「お玉ーっ、無事か！？」

「お玉ちゃん！」

お玉は、睡眠薬を打たれ、くびられた兔みたいに脱力していたが、血色も良く、気持ちよさそうに穏やかな寝息を立てていた。

「よ、よし、早いとこ外に運び出そう……」

「そ、そうですね……」

そう言いながら、みな目のやり場に困って咳払いした。お玉は、眩いばかりの全裸だったのだ……。

「や、やい平次っ、こっちを見るな、お玉の裸を見るなってんだ、こん畜生め！」

「そんなこと言ったって、おやつさん、見ないことには運べませんよ。それにあっしは、お玉ちゃんの裸なら何度も見て……あ」

「なな、何おう！？ この野郎ーっ、いつの間に俺の大え事な娘の裸を見やがった？」

「い、いつでしかねえ……ははは」

「何が、ははは、だ、こん外道め！」

平次に掴み掛からんばかりの剣幕で目をつり上げている藤次を、佐吉親分が怒鳴りつけた。

「馬鹿野郎っ！ やめねえか、みつともねえ」

そして彼は、着ている羽織を一枚脱いで、お玉の上にそっとかけた。

「今はそんな事してる場合じゃねだろ、太夫があのかけもんの気を引いている間に、早ええとお玉ちゃんを外に運び出さねえと……」

しかし親分がそう言い終わった刹那、ついに化け物の口からカメレオンのように伸びる舌が、松江太夫の蝶を捕らえたのだ。

念願の獲物をつかまえた喜びに歓喜の呻きをもらすと、化け物は、長い舌を素早く巻き取ってその白い蝶を口中に飲み込んだ。

くっちやくっちやくっちやく……

「……………う……………不味い……………不味い……………こんなもの喰えねえ」

化け物は、黄色い唾液と一緒に紙のかたまりをぺっと吐き出し、不愉快そうに視線を游がせた。そしてその拍子に、お玉を運び出すとして藤次たちの存在に気付いてしまったのである。

「くおらあ！ その女は、俺のもんだああ、俺が後で犯るんだああ、俺が後で喰うんだああっ！」

「まずい、化けもんが感づいたぞ」

「みんな、走れっ！」

四人は、お玉を抱えたまま慌てて出口へ向かった。

「むわてえ、おまえらああ！」

すかさず化け物が八本の足を不気味に蠢かせて追いかけてくる。しかし、人肉をぱんぱんに詰め込んだ腹を引きずっているためスピ

ードが出ない。

ずるずるずるずる……

「すおの娘には、うおれ様のいでーんしをぶち込んでやるんだあ、ぜえーたい逃いいがさねええ！」

化け物は、立ち止まって一声吼えたと、お玉を取り返すべく、鞭のようにしなる粘着質の舌を伸ばしてきた。しなやかな赤い舌が風を切ってぶうんと唸る……。

「ひっ」

「あとは、俺に任せろ」

刹那、永井兵庫が反転した。

と同時に裂帛の気合いもろとも佩刀を抜き放った。白刃が八口ゲン光を鋭く反射してぎらりと煌めく。

「えいっ！」

鞘走った津田助広作二尺八寸の刀身が、斜め下から化け物の舌を斬り上げた。切断された舌が、血を撒き散らしながら部屋のすみへ吹っ飛ぶ。

さらに兵庫は、振り上げた刀の柄を握る手首を返しながら、たたたと疾駆して間合いを詰め、化け物の前足目掛けて猛然と斬り下ろした。

「やあっ！」

「ぎゃあーっ！」

木材を断つような音がして、剛毛におおわれた太い足が床に転がった。

返す刀で、さらにもう一太刀。

「たあっ！」

「うつつ……」

前足を二本とも切断された化け物は、苦痛に顔を歪めてその場にうずくまった……。

「へっ、たわいのない。いつそ、このまま足を全部斬り落として、見世物小屋にでも据えてやろうか？」

丸っこい顔に嘲笑を浮かべながら永井兵庫がゆっくりと刀身を振り上げ、じろりと化け物を見下ろした。

「……それじゃあ地獄に帰ってもらおうかな」

兵庫は、化け物の首を刎ねるべく、ぐっと腰を落として踏ん張った。

と……その時、頭を垂れてうずくまる化け物の肩が小刻みに震え出した。兵庫は、その邪悪な雰囲気気圧され刀を振り下ろすのを一瞬ためらった。

「む……？」

化け物は、笑っていたのだ。

「……くつくく……ふっふっふ……はははーっ！ すおれは、ムリな相談だなああ！」

不意に、化け物が立ち上がった。次の瞬間、兵庫は信じられない光景を目にしていた。切断したはずの化け物の足が、みるみるうちに生え揃ったのである。

「なにい？」

「馬鹿がーっ、ひゃっひゃっひゃ、だまされてやんのーっ！ 本当は、痛くも痒くもないんだよおお。うおれは、ぜったいに死なないっ、ぎやははーっ！」

耳まで裂けた蓮華阿闍梨の口から、切断したはずの赤い舌が勢よく伸びて兵庫に襲いかかった。

こいつは、不死身か？

不意を突かれた兵庫は、鞭のようにしなる舌をかわすのに必死で、刀を振るう事も出来ず、ぐらりと体勢を崩した。その隙を逃さず化け物の丸太のように頑丈な足が一閃し、兵庫の顔を横殴りに叩きのめした。

「ぐわあ……」

血とともに前歯が数本吹っ飛んだ。兵庫は、そのまま五、六間ほど床を転がり、壁に激突してだらしなくのびた。

「ぶあかめ！　うおれ様を殺せるとも思ってたかーっ！　ひゃひゃひゃ」

化け物は、兵庫の顔にぺつと唾を吐いてから入り口の方に向き直った。藤次たちは、すでにお玉を外へ連れ出している。

「うおまえを喰うのは後だああ、むあずは、あの娘を取り戻すぞお」

化け物は、床に散らばった血や臓物を引きずりながら、入り口へと突進した。その重量を受けて、倉の床がみしみしと鳴った。

ずるずるずるずる……

「おい、兵庫ーっ！　大丈夫か？」

化け物が去ったのを見計らって機械のかけから松江太夫が飛び出し、兵庫の元へと駆け寄った。

「おい、しっかりしろ、おいってば……」

「……ああ、太夫か」

「馬鹿野郎、無茶しやがって……、あいつは、なんぼ手足を切り落としてもまたすぐに生えてくるんだよ」

「……ははは……そういう事は早く言ってくれなくちゃあ」

力なく笑った後、永井兵庫は、ごぶつと血を吐いた。

「もう喋るな、あたしが必ず助け出してやるから」

「……いいって、俺に構わずあんただけでも逃げな」

「馬鹿言ってんじゃないよ、このすつとこどっこいめ！」

弱気な兵庫を叱っておいて、松江太夫は、ゆっくりと立ち上がった……　なんとかあいつの気を反らす事が出来れば、その隙に逃げられるんだが」

そう呟いて化け物をぐつと睨みつける松江太夫の足下には、金色の髑髏が転がっていた……。

突然、倉の入り口にある重たい扉が勢いよく開け放たれた。

「ぬぁんだぁあ？」

化け物が驚いて立ち止まる。

そこには……………一人の少年が立っていた。

少年は、矜羯羅童子こんがらどうじしながらに頭髪を逆立て、そのどんぐり眼まなこでぐっと化け物を見据えた。

「うおいボウズーっ、そこにいと、喰っちまうぞおお、ひゃひゃひゃー！」

化け物は、ひとしきり大笑いすると、すかさずその凶悪な舌を伸ばし、入り口に立ちほだかる少年の顔を舐るようにぺちゃぺちゃと舐め回した。

「……………んん？」

だが、しばらくすると化け物は、渋い顔をしてすぐにその舌を引っ込めてしまった……………。

「……………不味い……………こいつは、喰えねえええ」

ぺっぺつと唾を吐く。

戸口の外では、佐吉親分や藤次たちが不安げな眼差しで事の成り行きを見守っていた。

「儀右衛門のだんな……………、本当にあんな物で、化けもんをやっつけられるんですかい？」

「俺を誰だと思ってるんだ？」 からくり儀右衛門”だぜ。まあ、見てなつて……………、あの『弓曳童子』は、俺の作品の中でも最高傑作なんだ」

少年の姿をしたからくり人形、弓曳童子がゆっくりと動き出した。ギーッ、ガッチャン……………ギーッ、ガッチャン……………ギーッ、ガッチャン……………

化け物は、訝しんで首をひねる。

「ぬあんだ、こいつ……？」

弓曳童子は、左手に見事な黒漆塗りの半弓を持っていた。化け物が呆気にとられている前で、彼は、背負っている矢筒かぶらから一本の鏑矢を抜き取ると、矢筈を弦につがえて半弓を引き絞った……。

キリキリキリキリ……

「やる気かあ、てめええええ」

いきり立った化け物が突進する。その瞬間、ひょうと矢が放たれた。鏑矢は、鋭い唸りをあげて空気を切り裂き、一直線に化け物の眼球を貫いた。

「ぎゃあああああーっ！」

「やったあ！」

佐吉親分たちが小躍りした。

「こりゃあ、てえしたもんだ！ やっこさん、先刻とはうって変わってずいぶん苦しがってるようですね」

「そうか、越ヶ谷、千住の谷！」

からくり儀右衛門が、ぽんと手を打った。

「やつが不死身なのは手足だけで、頭は再生しないんだ」

化け物が苦しがるなか、弓曳童子が早くも二本目の矢を番え半弓を引き絞った。彼の体内では、複雑に組み合わさった歯車がぎしぎしと音を立てて回転している。このからくり人形は、儀右衛門がこれまで培ってきた機巧技術の集大成なのだ。

いいか、頭を狙え、頭だぞ……。

佐吉親分はじめ、みなが思わず拳を握りしめた。

キリキリキリキリ……

びゅうつと二本目の矢が飛んだ。

鎗矢は、隼の羽音みたいに空気を震わせながら一直線に化け物へと吸い込まれていった。

しかし……。

「調子に乗るなあああ！」

化け物が渾身の力を込めて前足をぶうんと振り回した。矢は、阿闍梨の顔を射る前にくの字に折れ曲がり呆気なく弾き飛ばされてしまった。

「ちくしょう、払いのけやがったか、よし、もういっちょういたれーっ！」

嘆息と怒号が飛び交うなか、弓曳童子が三本目の矢を射た。矢は、過たず化け物の頭部めがけ飛んでいったが、しかし、これもすんでの所で見事にかわされてしまったのだ……。

「あー、おいしい……、もうちよつとの所だったのに」

平次が興奮した面持ちでぎゅっと拳を握りしめる。

「よし、この調子でがangan矢を射かけてやれ！」

「下手な鉄砲数撃ちや当たる……ってね、化けもんを仕留めるまでどんどんいきましよう」

盛り上がってやんやの喝采を送る藤次たちに、儀右衛門が水をさした。

「実はよ……、弓曳童子が矢を放てるのは四本までなんだ」

「何だって？」

みなが一斉に儀右衛門の方を振り返った。その目には、多分に失望と非難の色がこめられていた。

「……それじゃあ次の矢を射たらもうお終いつてわけかい？　なんなんだよ、役に立たねえな」

「何言つてやがる！　矢を四本射るだけでも大変な仕掛けなんだぞあれだけ複雑なからくりを造れるのは、日本広しと言えどもまあ俺くれえのもんだ」

「……とか何とか言ってるうちに、四本目が放たれますよーっ」

「ちくしょう、これで打ち止めか……、何とかあの憎たらしいツラ

を射抜いてほしいもんだが」

みなは、合掌して思い思いの神仏に祈った。

どうかどうか、みごと化けもんのまぬけヅラに当たりますように……。

しかし化け物は、余裕の表情で前足を振り上げて油断なく身構えた。

「ぶあかめーっ、こんなちやちな攻撃が、そう何度も通用するかああ」

弓曳童子が弦を引き絞る。

キリキリキリキリ……。

その時、松江太夫が、右足を後ろに大きく振り上げた。

「へっ、調子に乗ってんじゃないよ、てめえは、これでも食らいな！」

彼女は、その鋼鉄の右足を勢いよく振り下ろし、サッカーボールの要領で、黄金の髑髏を思いっきり蹴飛ばしたのだ。

ガッコーン！

重量約30キロほどもあるアンドロイドの頭部が、もの凄い勢いで化け物の後頭部に激突した。

ぼこ……。

「あがつ！」

化け物は、こぼれ落ちんばかりに目を見開いて、ぐらりと前のめに揺らいだ。その瞬間を逃さず、弓曳童子の引き絞った弓から最後の矢が快音を立てて放たれた。

ばびゅん！

矢は、閃光の如く真一文字に中空を駆け抜けけると、みごと蓮華阿闍梨の眉間に突き刺さったのだ。

「あ痛だあああああああ！」

「大当たりいーっ！」

たまらず化け物は、源頼光に斬りつけられた土蜘蛛のように、きりきりと舞い狂った……。

「ひ、ひとでなしいい……」

次回へ……。

弓曳童子（後書き）

だらだらと書いてきましたが、次回、最終話です。どうか最後まで
お楽しみ下さい。でわ……

見果てぬ夢……

「や、やったぞ！」

「へっ、ざまあ見やがれてんだ！」

弓曳童子の放った矢がみごと化け物の眉間に命中したのを見て、佐吉親分たちは、手を打って喜んだ。

「これで、あの化けもんの野郎もお終えだ……」

しかし、瀕死の手負いとなった化け物は、あっさりとは死なず、逆に半狂乱となって暴れ回り手がつけられない状態となってしまうのだ。

「いやだああ、うおれは、死ぬわけにはいかないのだあああ！」

「お、おい、化けもんが暴れ出したぞ、どうする？ 太夫や兵庫がまだ中にいるんだ」

「まずいな、早く助け出さねえと、巻き添いを食って死んじまうかもしれないねえ……」

そう言いながらも、藤次たちは、倉の中に踏み込むことが出来な
いでいた。化け物の暴れぶりは凄まじく、奇声をあげながらまるで
酔っぱらったようにふらふらと徘徊しては、機械を蹴倒したり壁に
穴を開けたりしていたのだ。

松江太夫は、舌打ちした。

「なんだかヤバそうな雰囲気だな、おい兵庫、このままここにいて
は危険だ、逃げるよ」

彼女は、永井兵庫に肩を貸して立たせると、よたよたと入り口を
目指して歩き始めた。

「しっかりしねえか。あの化けもんはじきに死ぬが、とぼっちり食
ってこつちまで道連れにされたんじゃないかなわねえ。もうちょっとの
辛抱だ、きりきり歩きな」

「……太夫、俺の事はもう放っておいてくれていい、あんた一人だけでも逃げてくれ」

「馬鹿言ってんじゃないよ、あたしが仲間を見捨てて逃げると思ukai? いいから、四の五の言わず、あたしの言う通りにしてな!」

松江太夫は、化け物から死角になるよう物陰などをたくみに選んで歩いた。

やがて、入り口付近でやきもきしながら中の様子を窺っていた佐吉親分たちが、二人の姿を見つけ大あわてで駆け寄ってきた。

「おい太夫、こつちだこつちだ!」

「よかった、生きてたみてえだな」

「ひとを勝手に殺すんじゃないよ」

「もう大丈夫だ、よし兵庫、俺たちにつかれ」

佐吉親分や藤次たちが、ぐったりしている永井兵庫を両脇から支え素早く戸口の外へと連れ出した。松江太夫は、ほっとしながらその後が続く……。

「くおらああ、うおまえら何処へ行くうつつ」

その時、化け物から勢いよく伸びた舌が松江太夫の足首に絡みつき、もの凄い力で彼女を引き倒したのだ。

「きゃあ!」

彼女は、仰向けにひっくり返ったまま、ずるずると化け物の方へ引きずられていった……。

「ば、ばか、放せ、放せてんだこの野郎!」

「太夫ーっ!」

藤次がささず手を差し伸べたが間に合わない。松江太夫は、あつと言う間に化け物の真ん前に引き据えられてしまったのだ。

「うおまえ女だろ? くくん……女の匂いがする」

「だ、だったら何だい? まさかあたしを口説こつてんじゃない

だろうね？」

化け物は、松江太夫にのし掛かって両肩をがっちり押さえ込んだ。彼女は、手足をばたつかせて抵抗したが圧倒的な腕力の差にねじ伏せられて体の自由が利かない。血まみれの蓮華阿闍梨の顔がぬーっと迫ってきた……。

「うおれは、もうすぐ死いいぬうう」

「……そ、そうみたいだね、線香でも上げて欲しいのか？」

「だが、うおれのいでーんしは、うおまえの中で生き続けるううう」

「ななな、何だつてえ！？」

突然、化け物は、松江太夫の両足首を掴んで左右に広げた。彼女の小袖の裾がめくれ上がり、白い太ももから下腹部までが露わになった。

「きやあ！ こ、こ、この助平ーっ！」

「うおれ、ぶち込むうう。うおまえの中に、うおれのいでーんしをぶち込むうう。そしたら、うおれは生き続けられるううう」

キメラ化して化け物と成り果てた蓮華阿闍梨であったが、その執念とでも言つべき生存本能は消えていなかった。赤黒い巨大な生殖器が徐々に松江太夫へと迫る……。

「わっ、馬鹿っ、来るな、それ以上近寄ると屁を引っ掛けるぞ……」

そんな様子を見ながら、佐吉親分や藤次たちは、どうしていいかわからず、ただおろおろするばかりであった。

「お、お、おい、太夫がてーへんだぞ、このままじゃあ化けもんのがキを生むハメになっちまう……」

「そりゃあまずいよ、だつてそうだろ？ そんな事になったら産婆さんが腰抜かす……」

藤次が泣き笑いの表情で後頭をぐしゃぐしゃと掻いた。

「おいおいおいおい、なに馬鹿な事言つてんだよ！」

その時、藤次たちの後ろから、からくり儀右衛門がずいっと割り込んできた。そして、化け物相手に必死の攻防を繰り広げている松江太夫に向かって大声で叫んだ。

「おい、太夫ーっ、聞こえるかあ？」

松江太夫は、すでに半べそである。

「こらーっ、呑気に構えてないであたしを助けろー！」

「よく聞け、お前さんの右足には、歩行するときの衝撃を吸収するために圧縮空気が詰まっている」

「だ、だから何さのさ？ あたしの足がこの状況で一体何の役に立つのさ？ って、ひいーっ、化けもんに犯されるー！」

「太夫、よく聞け！ 圧縮空気の力でその化けもんを倒すんだ、風砲と同じ原理だ」

「どどど、どうすればいいんだよーっ！」

「いいか、まず爪先を化けもんの顔に向けて狙いを定めろ、その後で、脛と足首を繋いでいる蝶番を外すんだ」

「どーやったらそれが出来るんだーっ！」

「うおおい！ 暴れないで大人しくうおれ様のいでーんしを受け入れろおお！」

化け物が、その巨大な腹の下から突き出す生殖器をずいっと押し出してきた。

「きやーっ！ ちよっちよっちよっちと待ってーっ！」

松江太夫の顔は、もはや涙でぐちよぐちよである。からくり儀右衛門のこめかみをすうっと冷や汗が伝い落ちた……。

「いいか太夫ーっ、落ち着いて聞いてくれーっ！」

「落ち着けるかーっ！」

「じゃあ、落ち着かなくていいから俺の言う通りにしてくれ、まず

右足の指を全て曲げるんだ」

「ま、曲げた、曲げたよ、この先は？ 早くしてくれ！」

「よし、じゃあその状態で中指だけ立てるんだ」

「そんな器用なこと出来るかー！」

「うおまえら、さつきからうるさいぞ……」

化け物がさらに腰をぐいっと突き出した。もはや彼の生殖器と松江太夫の距離は、一寸ほどしかない。松江太夫は、えっえっと泣きながらも必死になって儀右衛門から言われた通りの事を試みようとした。

しかし、足の中指だけを立てるというのは容易な事ではない。すでに化け物の生殖器は、その尖端を松江太夫に接触させていた……。

「うっ……、ひつくひつく、出来ないよ、足がつる」

「太夫、頑張るんだーっ！ 出来なきゃ、化けもんと夫婦の契りだぞーっ！」

性欲の権化と化した蓮華阿闍梨の顔が、にたーりと醜惡な笑みを浮かべた。松江太夫の全身に鳥肌が立つ……。

「嫌だーっ！ そんなの絶対嫌だーっ！」

叫びながら松江太夫は、女の意地と貞操を賭けて渾身の氣力を振り絞った。

そして次の瞬間、彼女の足の指は、みごとに『ファック・ユー！』の形を作ったのだ！

カシャン

松江太夫の金属製の右足首をつなぎ止めていた蝶番が外れた。と同時に、

スッポオオオオーン！

倉の内部に、能舞台で鼓を打ったような澄んだ音が響き渡った。

圧縮空気の力によって押し出された松江太夫の右足首が、まるでロケット砲のように飛び出し、蓮華阿闍梨の顔面に深々とめり込んだのだ。

「うつつぎゃあああああ……」

その反動で化け物は、仰向けにひっくり返ったまま八本の足をぴーんと伸ばし、ビクビクと痙攣し始めた……。

「おい、大丈夫かーっ、太夫ーっ！」

事の成り行きを安全な場所から見守っていた藤次たちが声を掛けた。

「うるせーやい、馬鹿野郎っ！」

松江太夫は、ひとくされ悪態を付いてからよろよと立ち上がり、断末魔の呻きを漏らしている蓮華阿闍梨を横目に見ながら、乱れた着物の裾を直した。

「ひ、ひどい目にあったぜ……、ちくしょう……女の敵め」

ちょうどその時、三番倉の周囲が慌ただしくなった。小池藤太郎が捕り方の人数を従えて駆けつけたのだ。

「太夫ーっ、もう大丈夫だ、奉行所の手勢が応援に来たぜ」

「だから、もう遅いんだって！……ふん、へっばこ役人め、今頃のこのこやって来やがって」

松江太夫は、裏返したカメみたいに情けない姿の化け物が、未だ醜悪な生殖器をぴーんと立てているのを見て、ふつつと怒りが込み上げてきた。

「こんの野郎ーっ、よくもよくも！　よーし、見てろよーっ」

彼女は、丸くて可愛い尻を蓮華阿闍梨の顔に近付けると、威勢よく小袖の裾をがばっと捲り上げた。

そして、渾身の力を込め思いつきり息んだのだ！

「それでも食らえーっ！」

ぷっつ。

その瞬間、七百年もの長きにわたって生き続けてきた未来の科学者、蓮見一郎教授は、完全にその生命活動を停止したのであった……………。

二十一、

海鳥の鳴き声とともに、頬を撫でる風が潮騒を運んでくる。

傍らに立つ松の木漏れ日が逆光となり、松江太夫は、眩しそうに長いまつ毛を伏せた……………。

視界いっぱいには碧瀾を湛えた海原が広がっている。

深川の果て、洲崎は、たび重なる津波の被害により寛政三年、幕府によって家屋が取り払われ洲崎原と呼ばれる一面の原っぱとなった。

春には、見渡す限りタンポポが咲き乱れ、秋になると竜胆がその薄紫色の可憐な花を咲かせる。今は、浜菅と鬼百合が恥ずかしげに風に揺れながら、背の高い夏草の合間に見え隠れしている。

松江太夫は、海岸線に沿った土手に立ち、両手を大きく広げて深呼吸した。

潮の香りと甘ったるいような熱風が肺いっぱいにみなぎる。

目を細めて、遠く江戸湾を望むと、銀光を揺らぐ水平線の彼方におもちゃみたいに小さな船影がゆっくりと動いているのが見える……………。

「よう、太夫じゃねえか、こんな所で何してるんだい？」

松江太夫が、欠伸を噛み殺しながら振り向くと、そこに渋茶染の着物を着た伊助がいた。

「あら……、誰かと思えば、六軒堀のご隠居じゃありませんか」

「こんな場所ではったり出くわすとは、奇遇だな、これも弁天様の御利益かい？」

伊助は、骨張った顔をくしゃくしゃにして笑った。

近くで楽しそうに潮干狩りをする子供たちの笑い声が、波の音に混じって聞こえる……。

「ああ、そうだ、平次とお玉ちゃんの祝言に顔を出してくれてありがとうよ。あの二人も、近々お前さんの所に挨拶に行くと言ってたぜ」

「結局、親子二代で岡っ引きになっちまったね」

「ははは、でも平次とお玉ちゃんは、五本松のあたりで畳屋を始めるらしいぜ。おたきさんにも手伝ってもらうんだとさ」

「ふうん……」

松江太夫は、小袖の裾をさばいて松の木の根本に腰掛けると、紺碧を遊ぶ白雲を見て眩しそうに目を細めた。

「そうだ、永井兵庫のやつ、体の塩梅はどうだい？」

「ああ、大したこたあなさそうだよ。顎の骨を痛めたんで、しばらくのあいだ軽口を叩けないだろうけど」

「ははは、そりゃ結構だ、いやいや失礼、大事にならなくて本当によかったよ」

そう言うってから伊助は、不意に真顔になって、

「……お前いさんはもう耳にしているとと思うが、儀右衛門の旦那、どうやら肥後へ旅立ったらしいぜ」

「へえ、本当かい？ あたしや初耳だね」

「そうかい、聞いてなかったかい……。何でも、佐賀藩に精錬方として招かれたんだそうだ、大砲を造るためにね」

「……………大砲ねえ」

「何だか物騒な世の中になつてきやがつたなあ……………」

伊助は、魚の鱗みたいにぎらぎらと光線の渦巻く遠い海原を見つめ、ふうつとため息をついた。

この二年後には、ペリーが浦賀に来航する事となるのだ…………。

「やつこさん、最後までお前さんの足の事ばかり気に掛けてたぜ」
「あたしの足は大丈夫さ、儀右衛門の旦那がすっかり直してくれたからね。まあ、大事に使っていてもそのうちガタが来るんだろうけど…………、そりゃあ生身の体だつて同じ事だからね」

松江太夫は、小袖の裾を割つてまぶしいほど白い足を見せながら笑つた。たまらず伊助が目を反らす…………。

「……………ねえ、ご隠居」

「なんだ？」

「人間がさ、死ぬ事なく、ずうつと生き続けられる世の中になつちまつたら…………、それは、あたしらにとつて幸せな事かい？」

突然、松江太夫がしんみりした口調で訊いた。

「なんだい、やぶからぼうに…………？」

「いえね、今回の事件であたしやつくづく考えちまつてさ…………。そりゃあ、人はだれでも長生きしたいよ、でもね、もし本当に何百年も生きられたとして…………、それで本当に楽しい人生が送れるなんて、あたしにやあ思えないんだ」

「まあ、そう言われりゃそうだろうなあ…………。それに、人が死なな

くなつたら住む場所が足りなくなつて困る。やっぱり、必要以上に人間が増えねえためにも、死ぬときあ、潔く死んでもらわなくちな」

「ははは、ご隠居らしいね、でも、大家さんとしちゃあ、店子がどんどん増えたら儲かつて仕方がないだろう？」

「べらぼうめ！ これ以上、家賃を払わねえ店子が増えたんじゃ、俺あ、首くくんなきやなんねえよ」

伊助が、また顔をしわくちやにして笑った。

「唐人の尻でからつけつ　ってね、あたしもふくめ、裏長屋に住まう連中はみな貧乏人ばかりさ」

「そうで有馬の水天宮　ってな、あつ、思い出した、俺あ、蕎麦を食いに来たんだ。どうだい太夫、縁起直しに冷てえところを一緒につるつとやらねえかい？　もちろん酒もご馳走するぜ」

「きやつほう！　蟻が鯛なら芋虫や鯨　ってね。今日は、なんか良い事があるんじゃないかと思つてたんだ、こんな所で黄昏れてた甲斐があつたよ」

松江太夫は、色っぽい仕草で立ち上がると洲崎弁天社の方角に向かつて、ぱんぱんつと二度かしわ手を打った。

限られた一生を精一杯生きるから人生は楽しいんだ。あたしや生きてるうちにせいぜい楽しませてもらうよ。

心の中でそう呟くと、松江太夫は、両の拳を握りしめ力一杯息んで……。

見果てぬ夢……（後書き）

相変わらずのおバカ小説でお恥ずかしい限りですが、最後までお読み下さり本当にありがとうございます。

当初、主人公の松江太夫は、バイオニック・ウーマンみたいなサイボーグにしようと思っていたのですが、さすがに江戸時代の科学力でそれはウソっぽすぎるだろうという事で、鋼鉄の右足を持つ手妻師という設定に変わりました。

SFを書かれる作者さんは、みなその作品中に奥深い世界観を構築されていて「さすがだな」と感心ばかりさせられました。いかまた、SF作品に挑戦する機会があれば、もう少しテーマを深く掘り下げ、もっとSFらしい小説を書けるよう努力したいと思います。（平成20年10月 閉伊琢司）

あとがきにかえて

今でも脳裏に焼き付いて放れない1枚の写真がある。

かなり古い記憶なので出所が定かではないが、確か『DAYS JAPAN』紙（1990年廃刊）に掲載されていたのではないかなと思う。

（旧）ソ連邦における死体安置所^{モルグ}の写真だ。

精肉店主^{ブッチャー}しながらに血の付いたエプロンを提げた死体管理人の中年男性が、陽気にポーズを取るその後ろで、解体を待つ死体の山を乗せたステンレス製の台車がずらりと並んでいる写真だ。

当時、日本ではようやく『脳死』や『臓器移植』といった言葉がメディアで使われ始めたが、革命時からマルクス主義の弁証法的唯物論を国家の哲学としてきた（旧）ソ連邦では、死体は国家の共用物であるとして決められた集積場に集められ、ごく当たり前のように医療や学術の材料として再利用されてきたのである。

私は、この写真を見て戦慄した。そう遠くない将来、人間の臓器が商品として流通する時代がやってくるかもしれないと思ったからだ。

臓器移植先進国のアメリカでは、ドナーから臓器を摘出する事を^{ハーベスト}刈り取りと呼ぶらしい。骨、靱帯、血管、膀胱、神経、角膜から心臓の弁に至るまで、取れる限りの部品を取り尽くすのである。皮膚までもハガキ大のサンプル数十枚に加工して摘出するのだ。

はたして、その行為に人を人として扱う倫理観は、ちゃんと存在しているのだろうか？

現在、世界的規模で見ても、臓器移植希望者に対するドナーの数が絶対的に不足している。自分の順番を待っている間に死が訪れて

しまうかもしれないのだ。

正規のルートで移植が出来なければどうするか？ いかなる業界にも、需要さえあれば必ず闇ルートが存在する。

梁石日著の『闇の子供たち』^{ヤン・ソギル}には、タイでの幼児人身売買における問題が、目を覆いたくなるような衝撃的なストーリーとして描かれている。タイの貧しい山岳地帯から買われて来た8才の少女が、最後には心臓移植を希望する裕福な日本人少年のために自分の臓器を抜き取られてしまうという、あまりにも悲しく、そしておぞましい話なのだ。

しかし、これは作家の想像力だけで作り出した絵空事であろうか？ 私は、そうは思わない。今でも、世界の片隅で、平然とビジネスの一つとして行われているであろう、あの写真から連想した悪夢が今では現実のものとなっていてに違いないと私は、確信している。臓器移植で助かる命が数多く存在するのと同時に、その影で家畜のように殺されている哀れな人たちも少なからず存在しているのではないか。

臓器移植に関しては、世界的な規模での倫理観の追求や法の整備が求められなければならないと切に思う。

さて、立花隆著の『人体再生』は、人間の耳を背中に付けたネズミの話から始まる。

これは、英BBC放送のドキュメンタリー番組に使われた映像で、放映直後、全世界に並ならぬ衝撃を与えたらしい。

もちろんこれは、人間の耳を切り取ってネズミにくっ付けたわけではないし、特撮などでもない。人間の耳の軟骨から取り出した組織を培養し、耳の形が出来上がるまで育ててからネズミの背に移植したものだ。

一般にティッシュ・エンジニアリングと呼ばれる技術である。再生医学とは、こうした技術により欠損した生体組織を修復しようという試みから出発している。

もし、患者自身から採取した生体組織を培養して、怪我や疾病の治療に利用できたとしたら、それは素晴らしい事で、先に述べた、他人から取り出した生体を患者に移植するという乱暴な方法よりもはるかに合理的で、しかも人道的ではないだろうか？

再生医学の研究は、世界各国が国家プロジェクトとしてしのぎを削り、すでに実用可能な一歩手前の段階まで来ている。

そう遠くない未来、ベンチャー企業の町工場で自分がオーダーした体の部品が製造され、好きなように交換できる時代が来るかもしれない。

バイオテクノロジーの恩恵だ。

いや、ちよつと待て……。

それが、本当に手放して喜べる素晴らしい話なのか？ 何も問題は存在しないのか……？

人は、その文明を進化させる過程で、『生命倫理』というものを見失ってはいないだろうか？ 命を造るという行為が、けつして人が手を出してはならない神の領域に属する所業という事はないのだろうか？

また、そうした技術で不老不死になるという事は、本当に許される行為なのだろうか？

その事を考えるとき、私は、小林泰三著の『人獣細工』を思い出す。

このホラー小説の主人公は、赤ん坊のときから臓器移植手術を繰り返しながら生きながらえてきたが、その臓器は、すべて豚の体内で培養されたものである事を後から知るのだ。やがて自分の体のほとんど全ての部分が、豚で培養したものであると知り、最後には脳までも豚の組織から造られたものと知って、主人公の女性は、ふと考えるのである。

「自分は、はたして人なのか……それとも豚なのか？」

再生医療には、無限の可能性があり、また、それを必要としている多くの患者が存在することも紛れもない事実である。

しかし、もし人類がその発展の過程で不作法に神の領域へと足を踏み入れ、未来への舵取りを誤ったならば、やがては倫理観の欠如した、人と豚の区別がつかないような大変危険な世界がやって来る可能性が大いにあると私は思う。

人は、いたずらに進歩させた科学技術によってのみ死への恐怖を回避するよりも、与えられた生命の恩恵に最大限の敬意を払い、他の生命をも尊重しつつ、限られた人生を精一杯生きるという根本的な哲学から、もう一度考え直してみるべきではないか、と私は思うのである。

『機巧乙女之手妻顛末』 あとがきにかえて 終

この小説を書くにあたって、下記の書籍を参考とさせていただきました。

記 （以下、五十音順）

『iSP細胞 ヒトはどこまで再生できるか?』 田中幹人著 日本実業出版社

『遺伝子時代の基礎知識』 東嶋和子著 講談社

『江戸アルキ帖』 杉浦日向子著 新潮文庫

- 『江戸売り声百景』 宮田障司著 岩波新書
- 『江戸切絵図を読む』 祖田浩一著 東京堂出版
- 『江戸職人図聚』 三谷一馬著 中公文庫
- 『江戸人物科学史』 金子務著 中公新書
- 『江戸っ子は何を食べていたか』 大久保洋子著 青春出版社
- 『江戸にぞつこん』 菊地ひと美著 文化出版局
- 『江戸のことわざ』 丹野顯著 青春出版社
- 『江戸の大道芸人 大衆芸能の源流』 中尾健次著 三一書房
- 『江戸町奉行 支配のシステム』 佐藤友之著 三一書房
- 『大江戸奇術考』 泡坂妻夫著 平凡社新書
- 『大江戸よろず雑学帖』 歴史散歩倶楽部編 ぶんか社文庫
- 『季寄せ』 山本健吉編 文藝春秋
- 『死体の本 善悪の彼岸を超える世紀末死人学!』 宝島社
- 『縮刷版 江戸学辞典』 弘文堂
- 『真言立川流 謎の邪教と鬼神ダキニ崇拜』 藤巻一保著 学習研究社
- 『真言・梵字の基礎知識』 大法輪閣
- 『図説 剣技・剣術』 牧秀彦著 新紀元社
- 『武器と防具 日本編』 戸田藤成著 新紀元社
- 『復元 江戸生活図鑑』 笹間良彦著 柏書房
- 『密教入門』 小宮山祥広著 ナツメ社
- 『理趣経』 松長有慶著 中公文庫

あとがきにかえて（後書き）

あとがきまでお読み下さり、ありがとうございます。なにぶん浅学なものですから間違った事を書いているかもしれません。その際は、ご指摘いただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0067f/>

機巧乙女之手妻顛末

2010年10月8日14時24分発行